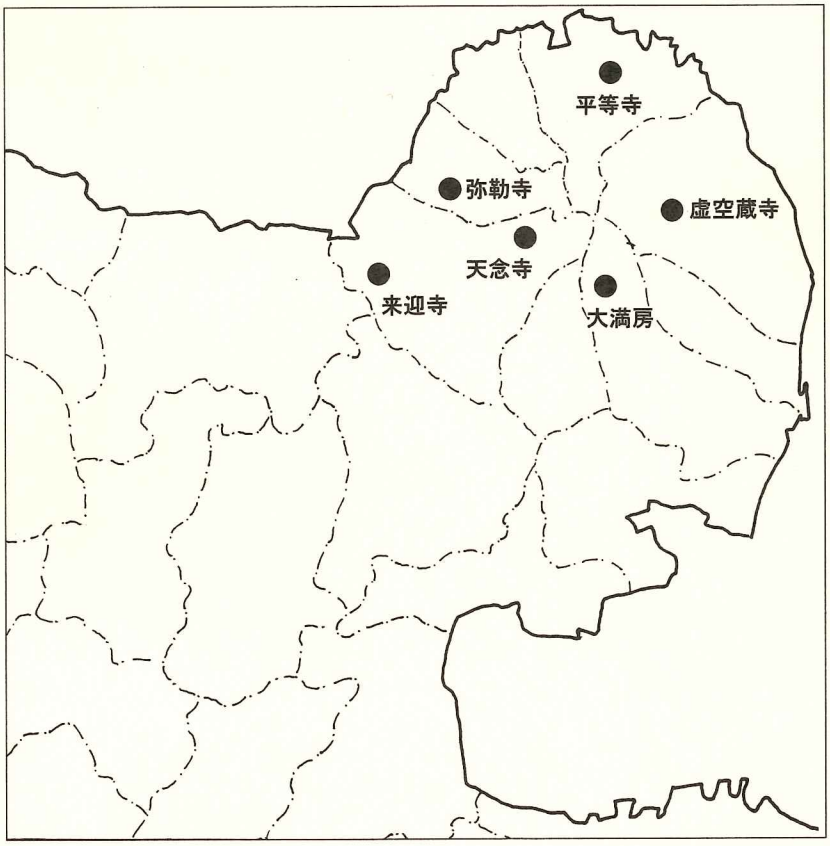
大分県立歴史博物館調査報告書第３集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅷ

平等寺・虚空蔵寺・大満房・毘沙門多宝院・海見山来迎寺・長岩屋山天念寺・唐渓山弥勒寺



2000

大分県立歴史博物館

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅷ

平等寺・虚空蔵寺・大満房・毘沙門多宝院・海見山来迎寺・長岩屋山天念寺・唐渓山弥勒寺

2000

大分県立歴史博物館

序　　文

大分県の国東半島一帯に点在する「六郷山」と総称される天台宗寺院は、古代・中世の山岳寺院です。これらの寺院の中には早くから廃寺になりその正確な位置もわからなくなった寺院も多く、近年ますます加速する村々の過疎化などによって関連する情報や資料が失われつつあります。 当館では、平成４年度から９年度の６カ年にわたって六郷山寺院の遺構確認調査を行ってきました。調査対象の寺院をすべて網羅するために、平成10年度から新たに３カ年継続して調査をすすめています。今年度は、その２年度に当たるわけです。

郷土の豊かな歴史を次の世代に正しく継承すべく、調査事業の実施に努める所存であります。本調査の主旨を御理解いただき、御協力を賜りました各寺院関係者および地元の方々、さらに地元教育委員会の皆様方に心から感謝し御礼を申しあげます。

平成12年3月31日

大分県立歴史博物館
館長　岩　井　宏　實

例　　言

1．本書は大分県立歴史博物館が実施した六郷山寺院遺構確認調査の平成11年度の報告書である。

2．調査は国庫補助を受け実施しており、平成11年度は以下の7ヶ寺を対象とした。

1	国見町	平等寺	中山分末寺
2	国東町	虚空蔵寺	末山分末寺
3	安岐町	大満房	中山分末寺
4	山香町	毘沙門多宝院	中山分末寺
5	豊後高田市	海見山来迎寺	本山分末寺
6	豊後高田市	長岩屋山天念寺	中山分本寺
7	真玉町	唐渓山弥勒寺	中山分末寺

3．調査にあたり各寺院の住職・総代をはじめ地元教育委員会および関係者の協力を得た。

4．遺構の実測・写真撮影・本書の編集は主として高橋が行い、第3章は櫻井および渡辺が執筆した。

目　　次

第1章　序説 …… 1

（1）調査の経緯 …… 1

（2）調査組織 …… 2

第2章　六郷山寺院の調査 …… 3

1　国見町　平等寺 …… 3

2　国東町　虚空蔵寺 …… 9

3　安岐町　大満房 …… 15

4　山香町　毘沙門多宝院 …… 15

5　豊後高田市　海見山来迎寺 …… 15

6　豊後高田市　長岩屋山天念寺 …… 16

7　真玉町　唐渓山弥勒寺 …… 25

第3章　調査成果と課題

（1）六郷山研究についての1、2の論点 …… 31

（2）六郷山寺院と仏像-本年度調査寺院を中心に- …… 41

図 版 目 次

第１図　六郷山寺院の主要分布図 …… 1
第２図　平等寺位置図 …… 3
第３図　平等寺境内実測図 …… 4
第４図　虚空蔵寺位置図 …… 9
第５図　虚空蔵寺岩屋付近実測図 …… 11
第６図　大満坊位置図 …… 15
第７図　海見山来迎寺位置図 …… 15
第８図　天念寺位置図 …… 16
第９図　天念寺伽藍実測図 …… 18～19
第10図　弥勒寺位置図 …… 25
第11図　弥勒寺境内実測図 …… 26

写真図版目次

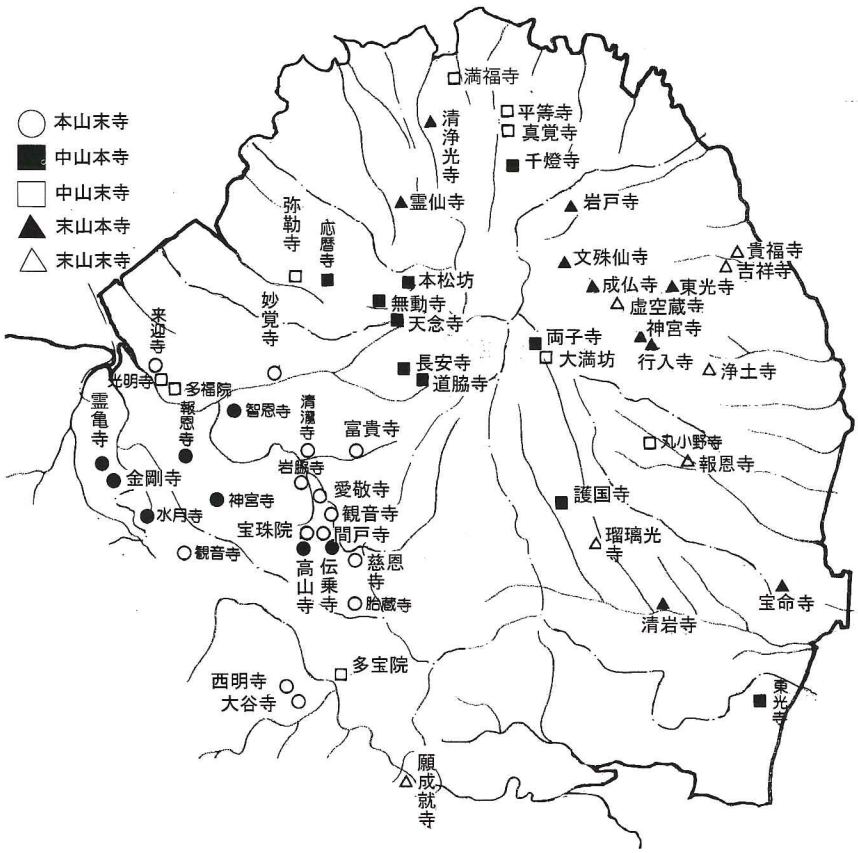
写真１　平等寺収蔵庫 …… 6
写真２　平等寺収蔵庫内の釈迦三尊像 …… 6
写真３　平等寺収蔵庫横の石仏 …… 6
写真４　平等寺参道上り口 …… 7
写真５　平等寺Ｄ地区の五輪塔 …… 7
写真６　平等寺六地蔵 …… 7
写真７　平等寺Ｄ地区宝篋印塔 …… 8
写真８　平等寺Ａ地区五輪塔 …… 8
写真９　虚空蔵寺遠景 …… 10
写真10　虚空蔵寺岩屋 …… 10
写真11　虚空蔵寺岩屋の坂道 …… 12
写真12　虚空蔵寺試掘状況 …… 12
写真13　岩屋内の焼仏 …… 13
写真14　岩屋内の焼仏 …… 13
写真15　岩屋内の焼仏 …… 13
写真16　自然石上の加工痕 …… 14
写真17　石塔笠残欠 …… 14

写真18　石碑 …… 14
写真19　天念寺と背後の山塊 …… 20
写真20　天念寺講堂 …… 20
写真21　天念寺身濯神社遠景 …… 20
写真22　天念寺F地区の岩屋遠景 …… 21
写真23　身濯神社拝殿内部 …… 21
写真24　天念寺境内の石垣 …… 21
写真25　川中不動遠景 …… 22
写真26　川中不動近景 …… 22
写真27　天念寺F地区の無縫塔 …… 22
写真28　天念寺境内の石塔（石灯籠他） …… 23
写真29　寛政2年銘の盥盤 …… 24
写真30　天念寺境内の石塔 …… 24
写真31　文殊種子石碑（正面および側面から） …… 24
写真32　弥勒寺遠景 …… 25
写真33　弥勒寺堂宇 …… 28
写真34　堂宇内の仏像 …… 28
写真35　弥勒寺三社大権現の鳥居 …… 28
写真36　境内の五輪塔 …… 29
写真37　三社権現全景 …… 29
写真38　三社権現の石造品 …… 29
写真39　銘文の刻された石垣 …… 30
写真40　石造神像 …… 30
写真41　墓碑 …… 30
写真42　宝篋印塔 …… 30

第１章　序　　説

（１）調査の経緯

国東半島には、古代から中世にかけて繁栄した「六郷山」と総称される64ケ寺の天台宗寺院が所在する。六郷山寺院については、古くからその堂宇の建築学的な調査や文献調査が行われてきた。残念ながら、考古学的調査はほとんど行われておらず、寺域や寺の規模、伽藍配置、遺構の状況といった寺院の詳細についても不明な点が多かった。当事業は六郷山寺院の全体像を把握するため、寺院遺構の存否、遺存状況、寺域などについて確認を行いこれを図化して六郷山寺院の研究に資するとともに将来の開発に対処する事を目的とするものである。当館の前身である宇佐風土記の丘歴史民俗資料館では、平成４年から平成９年度までの９カ年に及ぶ六郷山寺院の遺構確認調査を実施してきた。しかしながら六郷山寺院すべてを網羅できず、そのため平成７年からさらに３カ年の継続調査を試みている。



第１図　六郷山寺院の主要分布図（『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による）

（２）調査組織

1　調査責任者　　大分県教育委員会　　教育長　田中恒治

2　調査委員および調査員の構成

調査委員	小田富士雄	福岡大学教授	
	関　秀夫	大正大学教授	
	千々和到	国学院大学教授	
	後藤宗俊	別府大学教授	
	飯沼賢司	別府大学教授	
調 査 員			
	岩井宏實	大分県立歴史博物館	館長
	高橋秀典	同	副館長
	真野和夫	同	副館長兼学芸課長
	渡辺文雄	同	調査課長
	山田拓伸	同	主幹研究員
	菅野剛宏	同	研究員
	櫻井成昭	同	研究員
	平川　毅	同	研究員
	堤　真子	同	嘱託
	渋谷忠章	大分県教育庁文化課	課長補佐兼埋蔵文化財第一係長
	吉永浩二	同	主幹兼文化財管理係長
	永松みゆき	国東町教育委員会副主幹	
	松本啓子	安岐町教育委員会主査	
	河野典之	豊後高田市教育委員会社会教育課技師	
	下村精一	真玉町教育委員会文化財調査専門員	
調査担当	高橋　徹	大分県立歴史博物館主幹研究員	
調査事務	阿部正敏	大分県立歴史博物館総務課長	

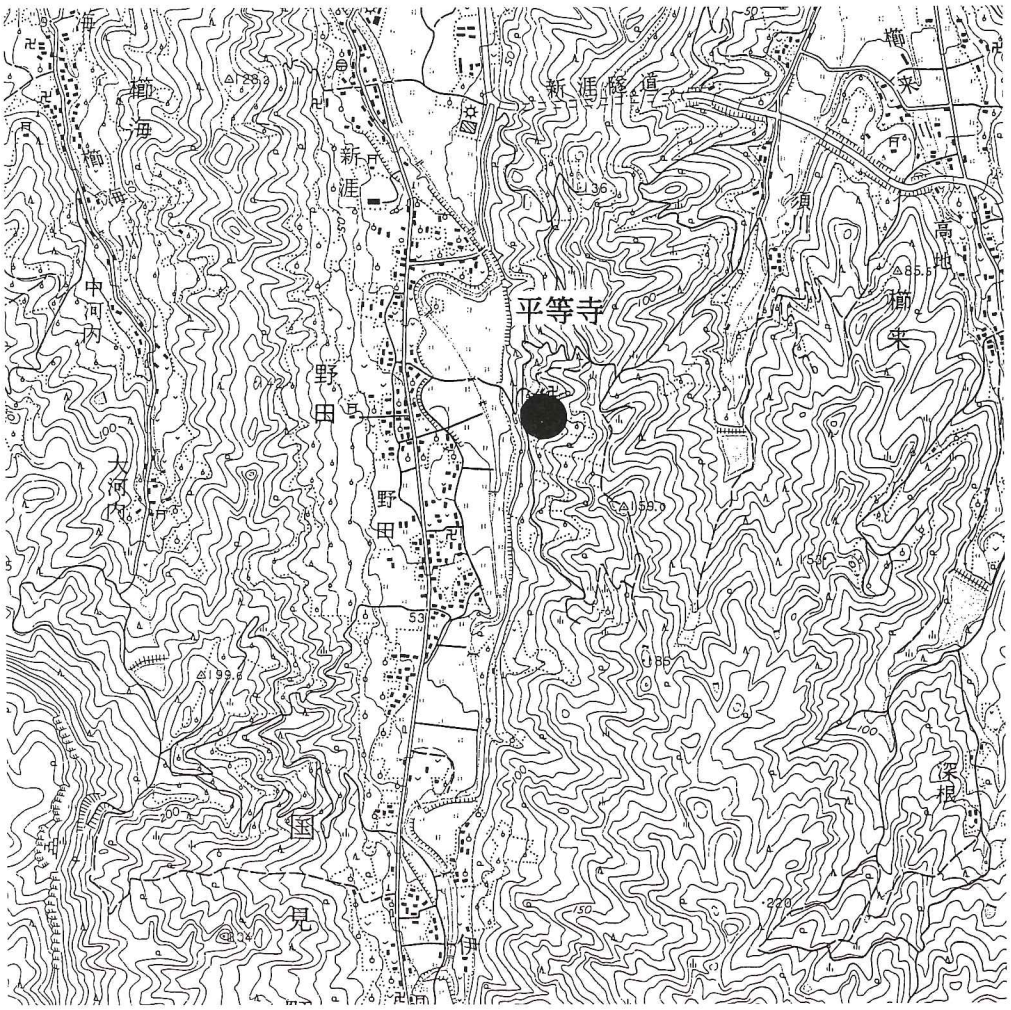
第２章　六郷山寺院の調査

１　平等寺

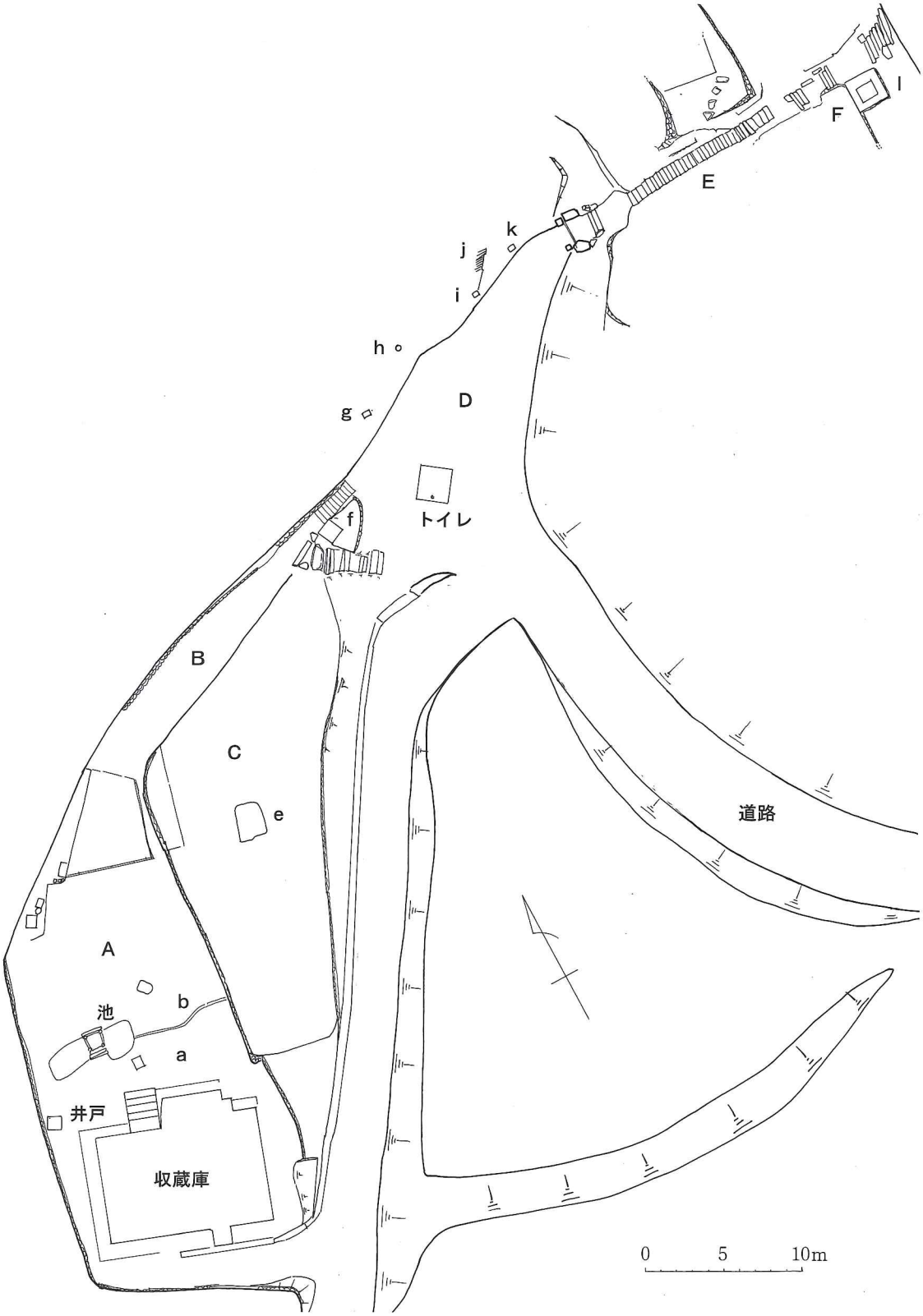
（１）位置と環境

平等寺は国見町大字野田字平等寺にある。伊美川の右岸、野田山西側の中腹に立地する。『太宰管内志下巻』の『仁安三年六郷二十八山本寺目録』には中山分末寺平等寺とあり、建武４年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』（永弘文書）には中山本寺千燈寺末寺としてその名が見える。

室町時代の『定額院主目録』にも、「補陀落山千燈寺嶺松院徒呂三十八ヶ所云々来死海の薬師堂伊美丿平等寺‥‥」と記載がある。さらに安永５年（1776）『天台宗豊後国六郷山寺院名簿』には「千灯寺末無住」とあり、江戸時代後期には無住となっていたことがわかる。



第２図　平等寺位置図



第３図　平等寺境内実測図

大宰管内志は、「国人云　平等寺は竹田津の内野田山村にあり小菴なり」と記している。天保9年(1838)、領主松平氏の指示で代官、村民によって堂宇の再建がおこなわれたが、その後無住廃屋となり現在に至っている。なお、昭和47年に観音像の盗難を契機にして収蔵庫が建てられている。

（2）遺構の状況

現在、平等寺の境内地には古記録に該当する往時の堂宇およびその遺構は存在しない。境内地の最奥部はおよそ450㎡ほどの平旦地（A）で、ここに昭和47年および同60年に建てられた収蔵庫と庫裡がある。また井戸や池が設けられており、庚申塔（a)や五輪塔(b，d)などの石造物が配置されている。B区を20mほど北に進み、短い石段を降りるとDの平旦地に至る。この石段の降り口に、町指定の宝篋印塔（f：227cm）が1基ある。南北朝後期のものであろう。

Dの平地は2等辺三角形状で、北側の縁部に無縫塔（h)や小型の宝塔（j)、板碑（k）等の石造物が点在する。D区北東部隅から参道石段となり、これを降り切ると東西に走る山道に取りつくことになる。このAからDの平旦地や参道の両側にはそれぞれ平旦地があり、中には古の坊の跡地も含まれていると考えられるが、今回の調査では確認していない。なお、参道上り口には六地蔵(l)が、F地区の平旦地には数基の無縫塔や墓碑が残されている。

ところでA地区の東側（C）は1段低い平旦地であるが、ここに平等寺および近隣に散在していた五輪塔類が200基以上集められている。その中心に町指定宝篋印塔（e:高さ226cm。相輪を欠く。）1基が据えられている。

平等寺は文献に釈迦堂と記されており、釈迦三尊像が本尊仏であったようである。現境内地にはこうした仏像の製作時期に対応するような石造物や遺物・遺構は確認されていない。また、他の六郷山寺院に通有の奥の院や権現社等も知られておらず、寺の性格やその由来について重要な問題をはらんだ寺院である。これについては後章の別稿に譲る。

写真１　平等寺収蔵庫

写真２　平等寺収蔵庫内の
釈迦三尊像

写真３　平等寺収蔵庫横の石仏

写真４　平等寺参道上り口

写真５　平等寺Ｄ地区の五輪塔

写真６　平等寺六地蔵

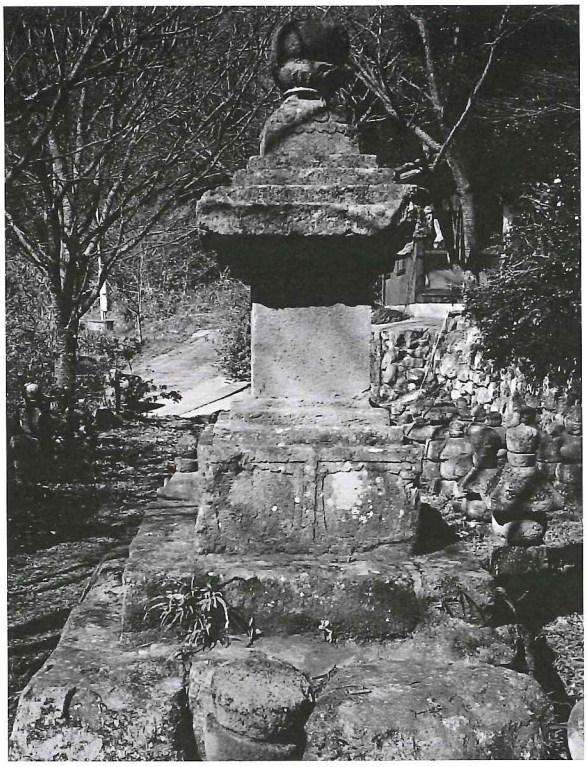


写真７　平等寺Ｄ地区宝篋印塔

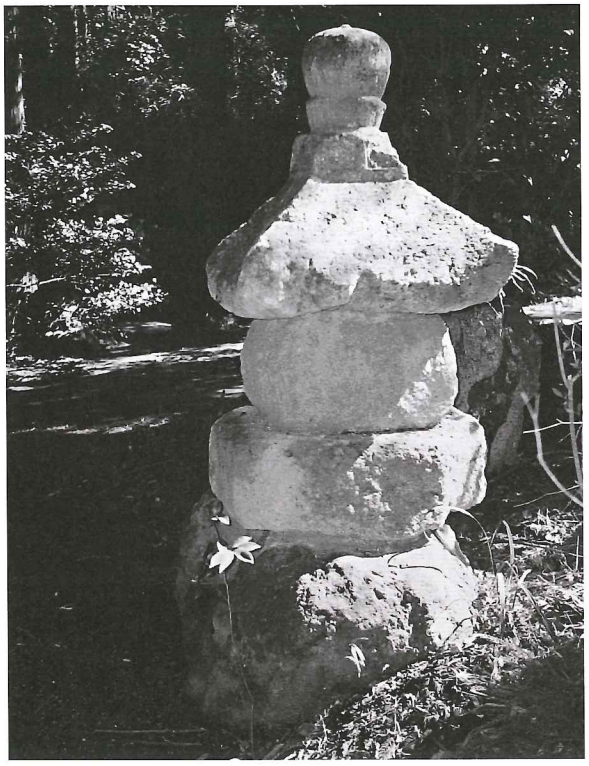
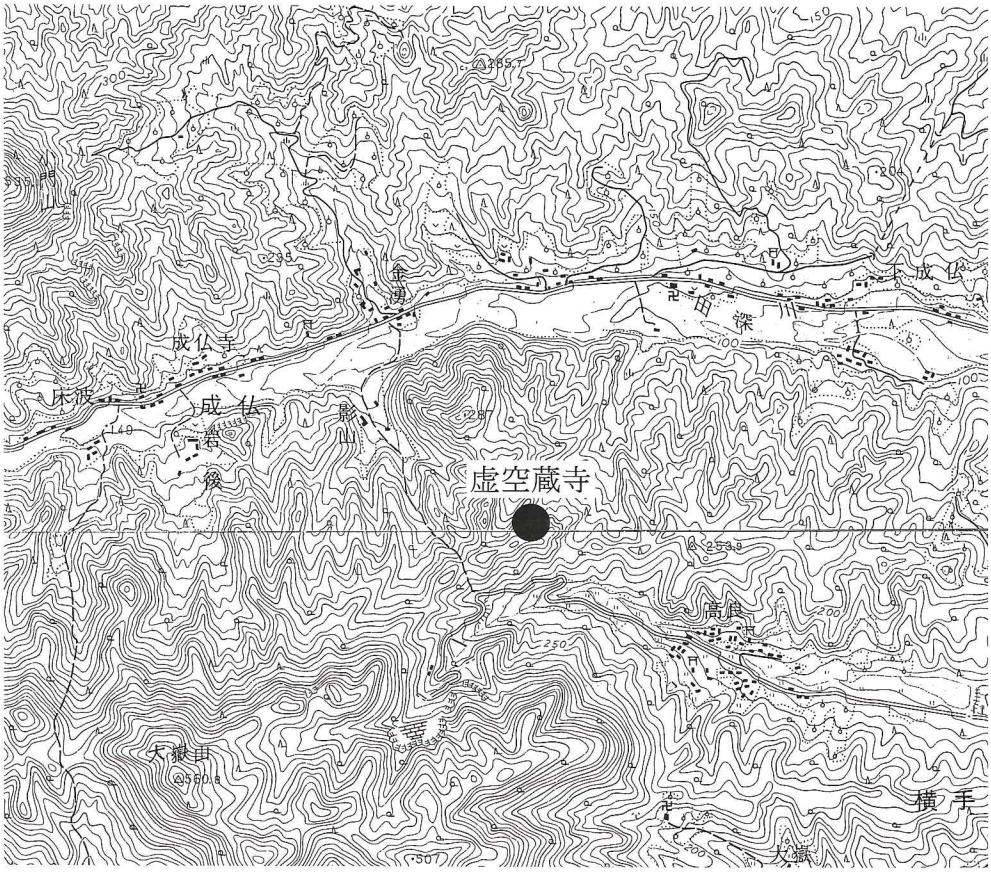


写真８　平等寺Ａ地区五輪塔

2　虚空蔵寺

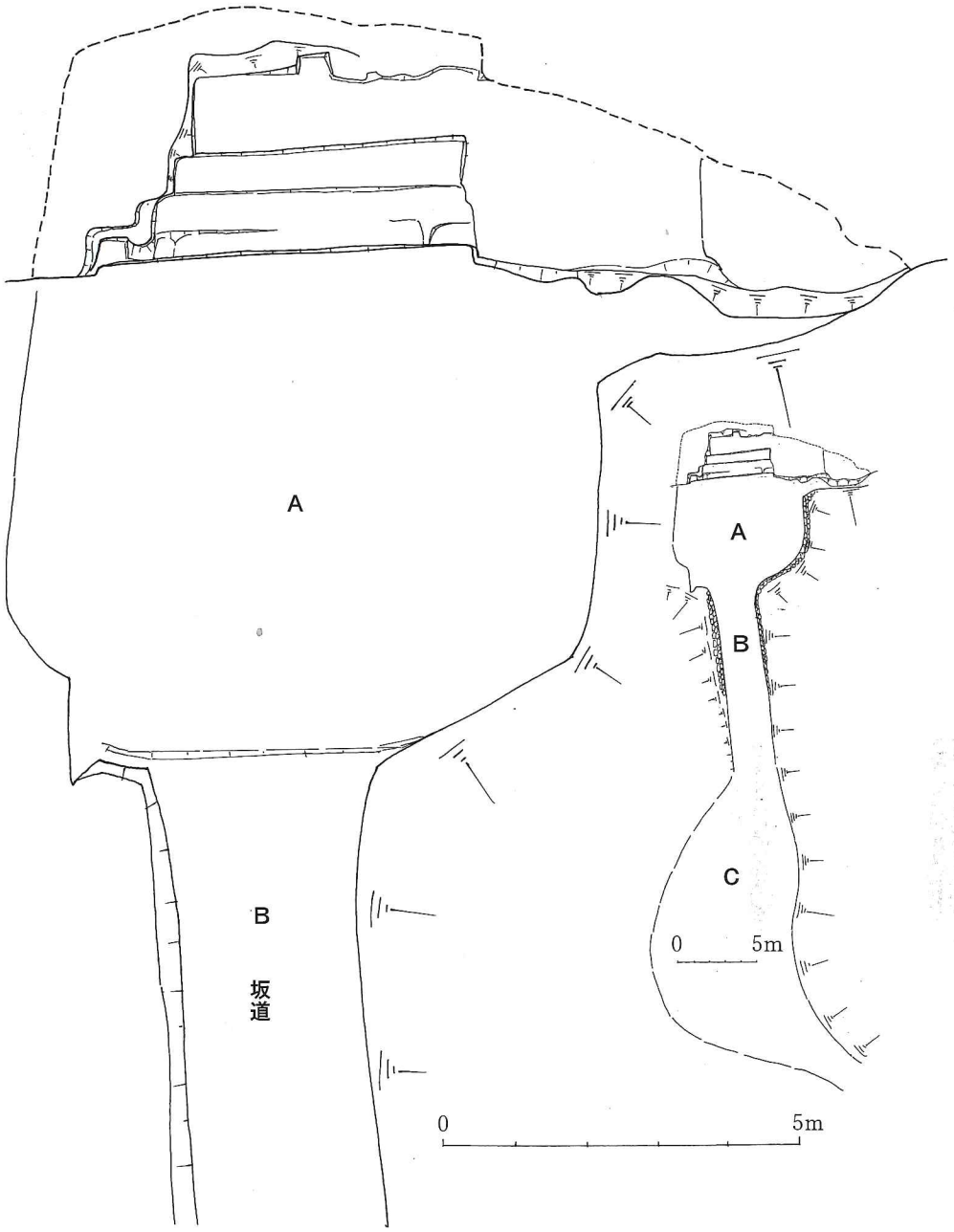
虚空蔵寺は国東町大字下成仏字虚空蔵に所在する。本寺は、仁安３年目録や安貞２年『諸勤行注進目録』に記載されており、成仏寺の末寺として位置づけられている。田深川の上流、小園橋を右岸に渡り徳永太市宅地前の山道を谷筋に沿って600～700m程上ると、垂直の岩場にできた岩陰を利用して成形した岩屋に辿り着く。岩を横12m、奥行き3m、高さ2m以上に削り込み、床面は３段に削りだす。残欠６点を含む計13点の焼仏が安置されている。岩屋の前面は6m×7mの平旦地（A）で、近世瓦や陶磁器、礎石風の石が散在する。岩屋の上部崖面に屋根をはめ込んだ溝跡が残っており、本来岩屋は瓦葺の屋根を持つ小堂に組み込まれていたのであろう。これを奥の院とすれば、これから短い坂道（B）を降りると、およそ100㎡の平地（C）があり、トレンチ調査の結果、柱穴（１）や土師器灯明皿を検出した。他の遺物が出土せず、当地の堂宇は日常の居住に用いたものでなく、仏像を安置した堂宇であったと思われる。BやC地区下方の斜面や平場には石碑（延享４年銘）や石灯籠の部材などが散見できる。なお、Cの平地から谷を下っていく間にも、かなりの広さを持つ平場や上面に加工痕のある自然石、板碑状に陰刻した墓碑などがみられる。小字名からみても、この谷筋全体を虚空蔵寺の寺域と考えてよいのではなかろうか。



第４図　虚空蔵寺位置図

写真９　虚空蔵寺遠景

写真 10　虚空蔵寺岩屋



第５図　岩屋付近実測図

写真 11　虚空蔵寺岩屋の坂道

写真 12　虚空蔵寺試掘状況

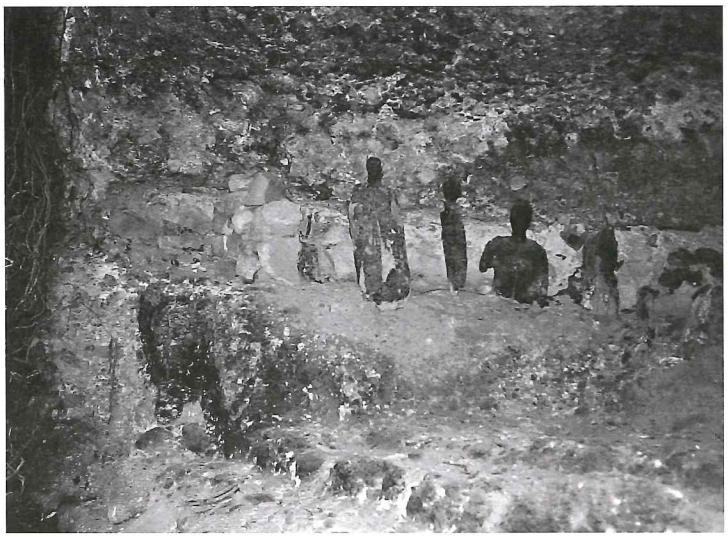


写真 13　岩屋内の焼仏

写真 14　岩屋内の焼仏

写真 15　岩屋内の焼仏

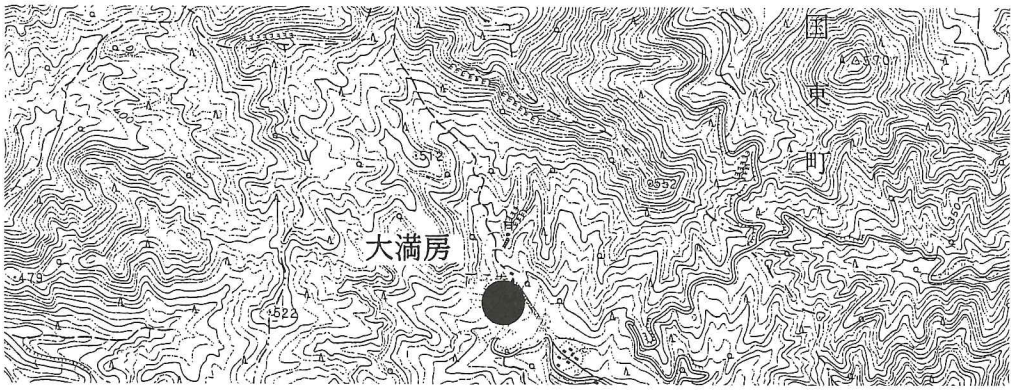
写真 16　自然石上の加工痕

写真 17　石塔笠残欠

写真 18　石碑

3　安岐町　大満房

仁安３年『六郷二十八山本寺目録』に中山末寺大滿坊と記されているのみで、その詳細は不明である。安岐町両子寺の諸坊の中に大万坊と称する坊が存在するが、仁安目録に記されたものとどういう関係にあるのか不明である。



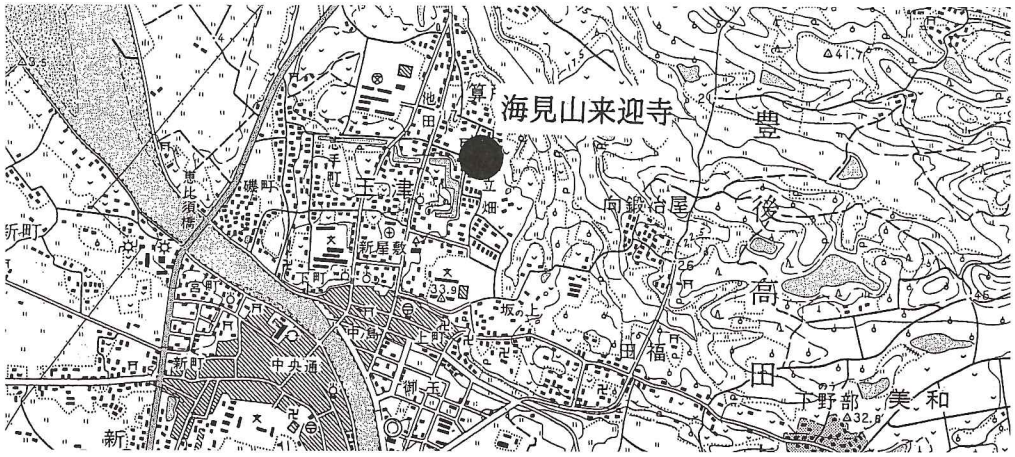
第６図　大滿房位置図

4　毘沙門多宝院

仁安目録に中山分末寺と記された本寺院について、これまで本館が刊行してきた書籍では山香町の倉成付近を所在地に比定している。しかしながらこれには確たる根拠もなく、毘沙門多宝院の跡地は不明というほかない。本寺に関しては後章において再考している。

5　海見山来迎寺

仁安目録に「本山分末寺海見山来迎寺云々」、建武４年の注文案には本山末寺来迎寺、「高山丿末寺也、限東丿ウヘ丿谷　限西シテ丿大道　限南高田河　限北草地の堺」とある。その他『定額院主目録』にも「無量山来迎寺院主寶宅院高山丿末徒也」の記載がある。この来迎寺の所在地として、飯沼賢司氏は高田市玉津の旧高田城付近を想定しており、これに従いたい。



第７図　海見山来迎寺位置図

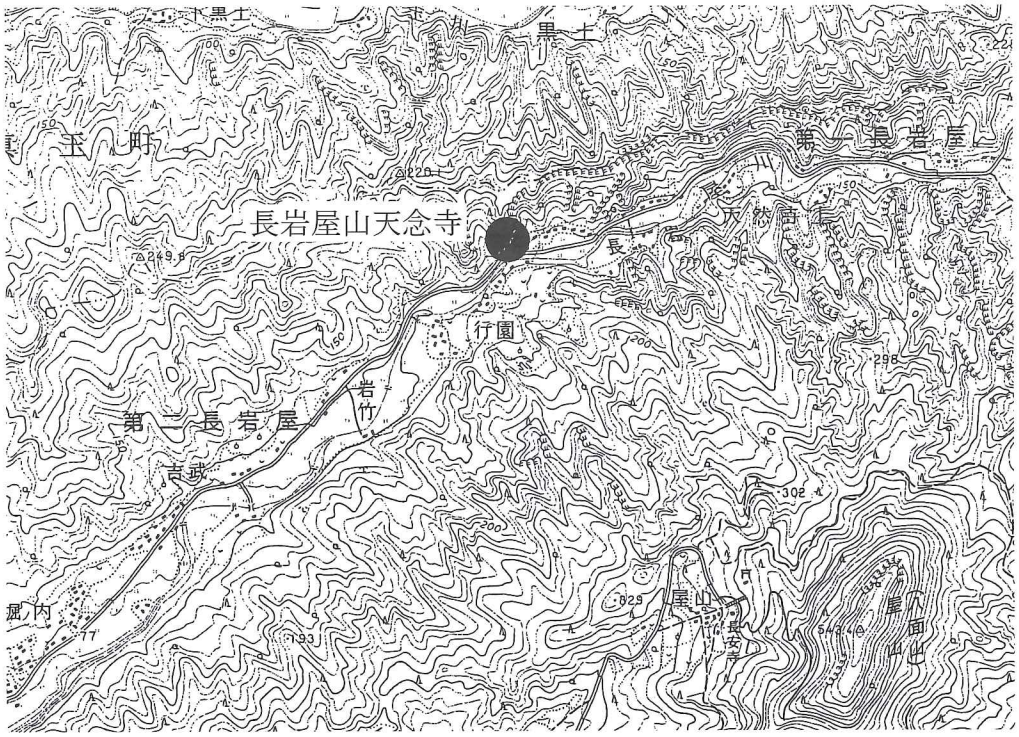
6　長岩屋山天念寺

豊後高田市長岩屋に所在する天念寺は長岩屋川の右岸にある。切り立った山塊の崖面にへばりつくように堂宇が建てられている。『二十八山本寺目録』に正宗分中山10ヶ寺の一とあり、六郷山中山の筆頭にあげられている。建武4年の注文案の伝える寺域は、「限東赤丹畑大タウケト号　限西恒吉西福寺下谷　限南尾ノ鼻ヨリ加礼河マテ大道　限北美尾」で、現在の大字長岩屋の範囲にほぼ一致すると考えられている。

（1）天念寺の主要伽藍

石垣で画された境内の東側に3間×4間の南面する講堂（A）があり、その東に身濯神社拝殿（B）が隣接する。倉庫（C）の東は一段低い平場（D）で、これの最奥部は岩屋（E）とこれを覆っていたと思われる堂宇の跡地（F）が確認できる。D区の東に本堂（G）があり同じ面で駐車場(H)に続く。「円重坊跡」や「大満坊跡」、「二本坊跡」、「門の坊跡」は『定額院主目録』に記す「徒呂十二房」の坊跡比定地である。うち「円重坊跡」と「門の坊跡」比定地には多数の五輪塔が群集する。

講堂の屋根は岩屋に差し掛ける形式をとっており、講堂奥壁には薬師如来像および観音菩薩像を安置。本堂と庫裡は昭和16年の水害で消失し、その後本堂のみは木造セメント瓦葺建物として再建され、庫裡の跡地は駐車場となったままである。



第8図　天念寺位置図

（2）岩屋

天念寺背後の険しい岩場には、小両子岩屋や龍門岩屋他 10 の岩屋があって、各々仏像を安置していたが、これらの諸仏はすべて天念寺に移されている。

（3）六所権現

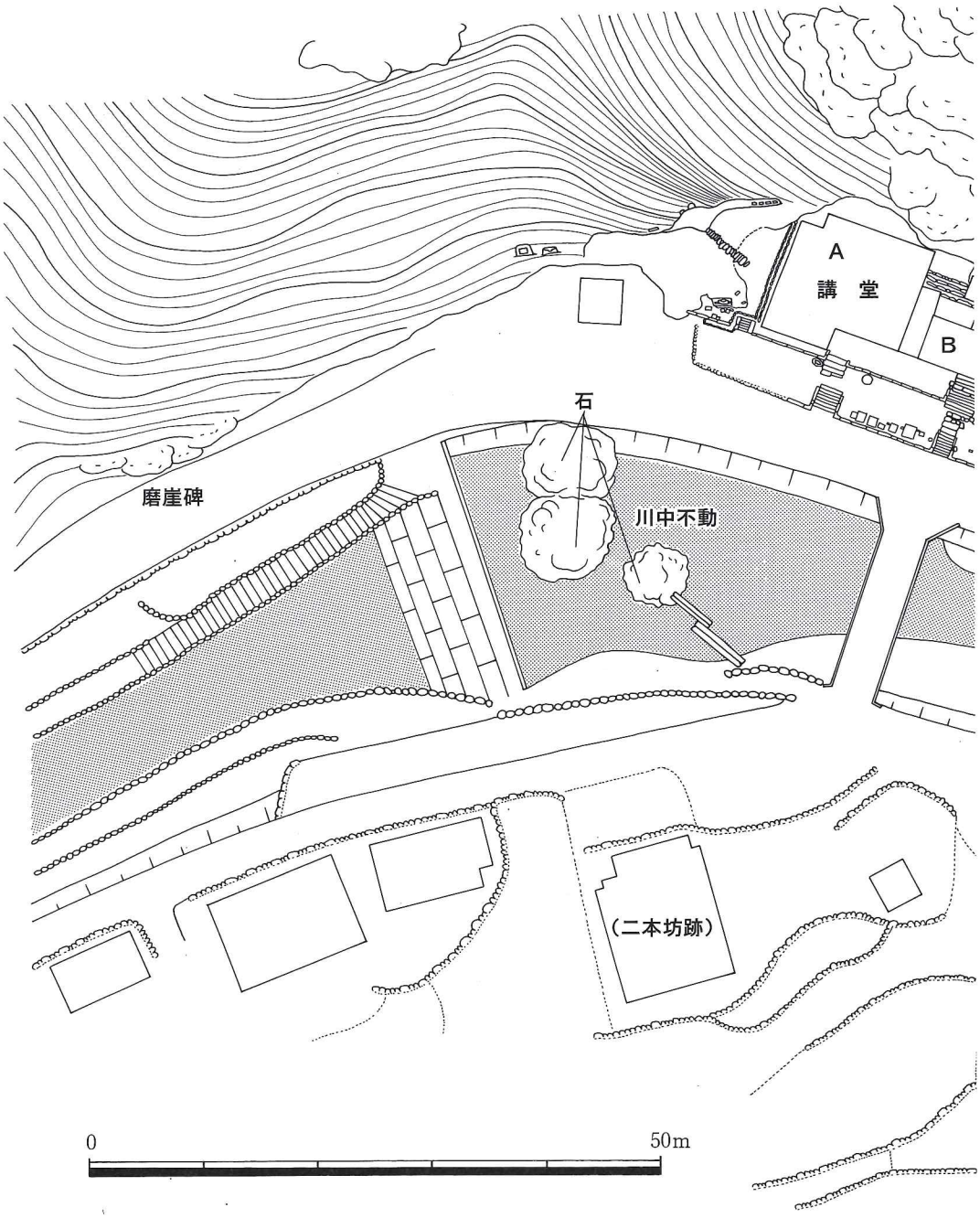
天念寺の境内社である身濯神社は明治初年までは六所権現と呼ばれていたらしい。『天明年中六郷山寺院名簿』には「本堂観音一　六所権現」と記載されている。

（4）石造品

天念寺境内地には鳥居、板碑、五輪塔、庚申塔、盥盤、石柱、石殿、石灯籠、無縫塔等の石造品が立ち並んでいる。大半は近世のものである。堂前の長岩屋川中に巨石があり、これに不動明王とコンガラセイタカの二仏が浮き彫りされている。川の対岸に据えられている文殊種子石碑は、高さ 195cm、幅 80cm、最大厚 30cmの安山岩自然石である。以下の銘文が印刻されている。

奉造立石卒塔婆一本
当山如法五千日護摩八千枚加持八曼荼羅
マン　建武五年 戊刀 四月八日
金剛仏子阿闍梨順賢
右造立趣者順賢成仏得道也
別当山安穏法界衆生為

ところで、円重坊跡や七朗ヶ迫の五輪塔は鎌倉末～室町に比定される中世に遡る石造物である。天念寺境内地の石造品が近世のものを主体にすることと併せて考えるなら、中世の長岩屋と現天念寺の相貌はいささか異なっているように思われる。



第９図　天念寺伽藍実測図

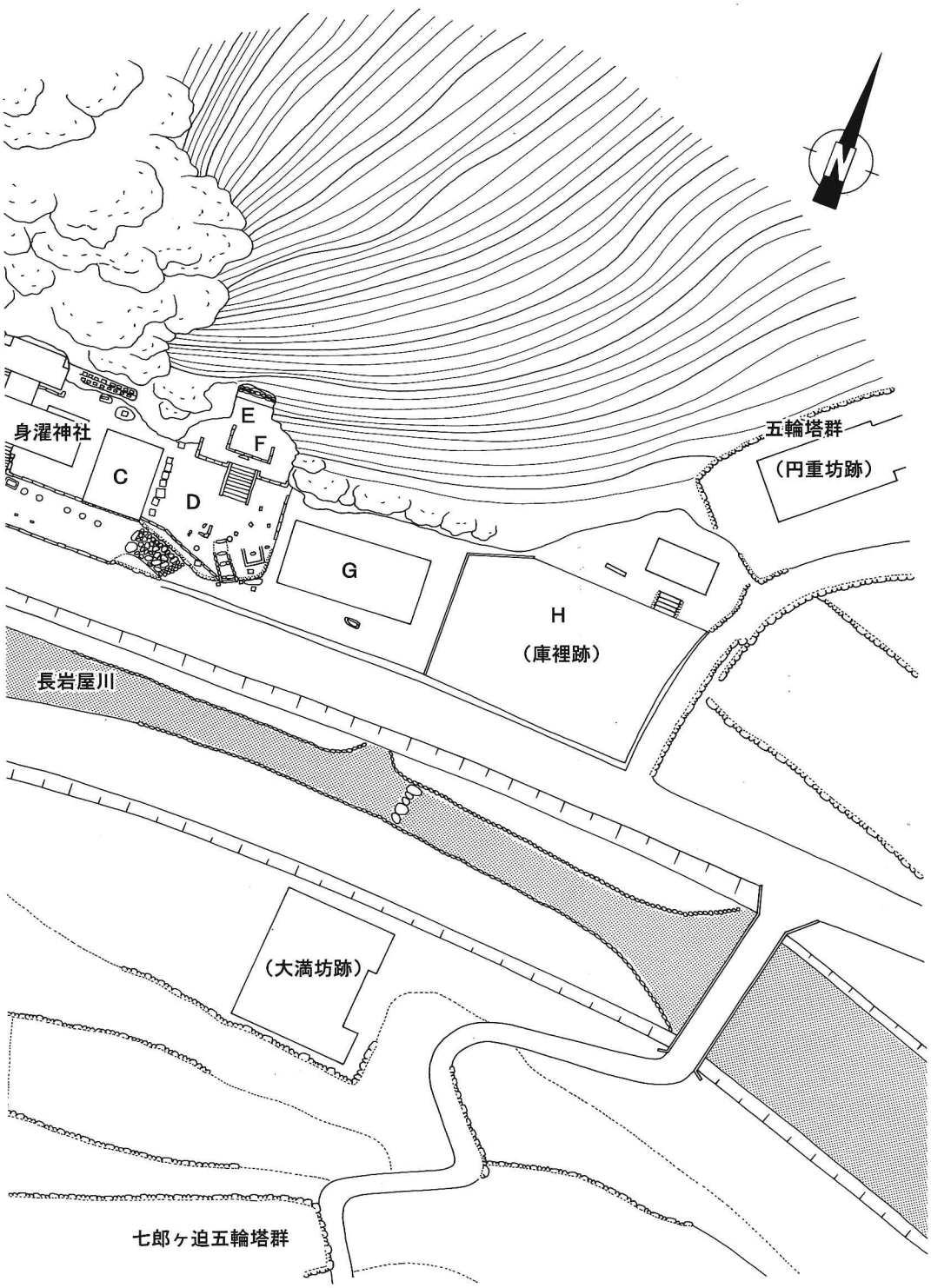

身濯神社
C
D
E
F
G
H
（庫裡跡）
五輪塔群
（円重坊跡）
長岩屋川
（大満坊跡）
七郎ヶ迫五輪塔群

写真 19　天念寺と背後の山塊

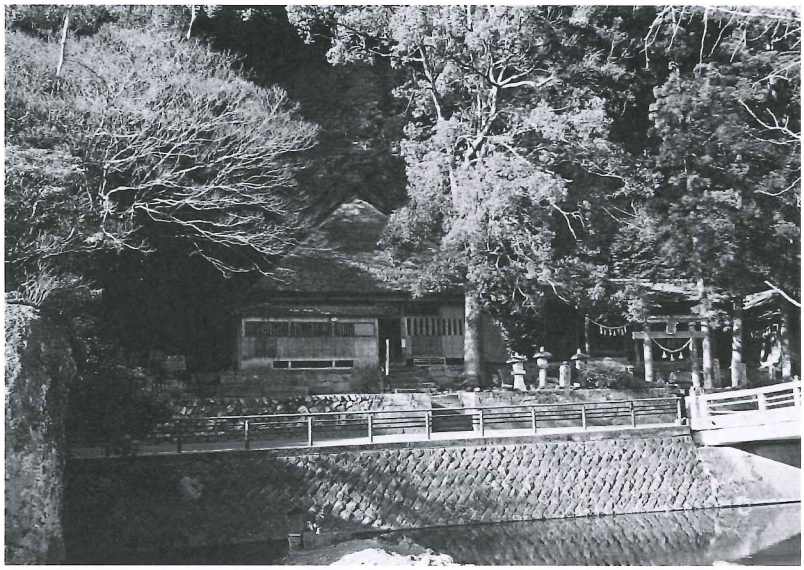


写真 20　天念寺講堂

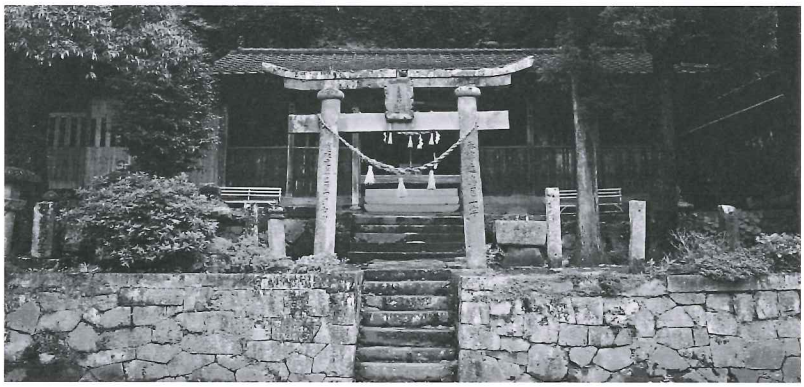


写真 21　天念寺身濯神社遠景

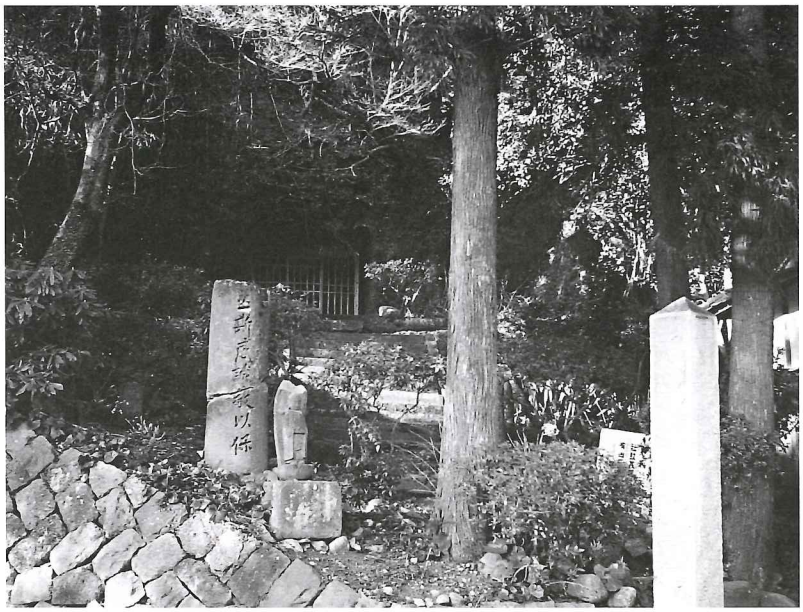


写真 22　天念寺Ｆ地区の
岩屋遠景

写真 23　身濯神社拝殿内部

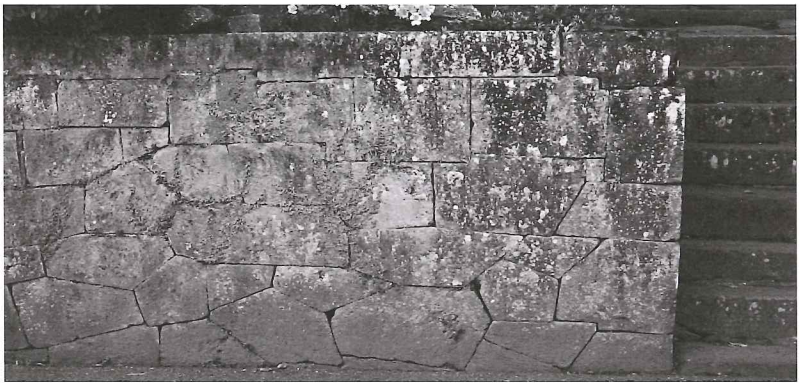


写真 24　天念寺境内の石垣

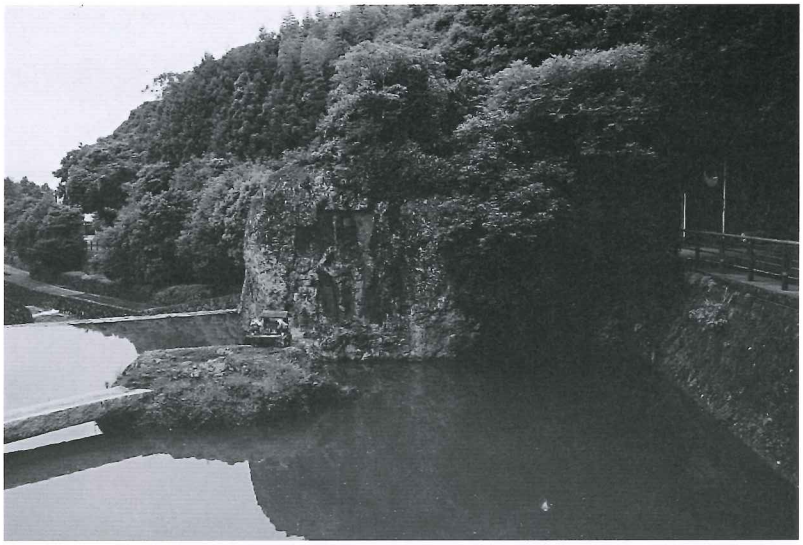


写真 25　川中不動遠景

写真 26　川中不動近景

写真 27　天念寺Ｆ地区の無縫塔

写真 28　天念寺境内の石塔（石灯籠他）

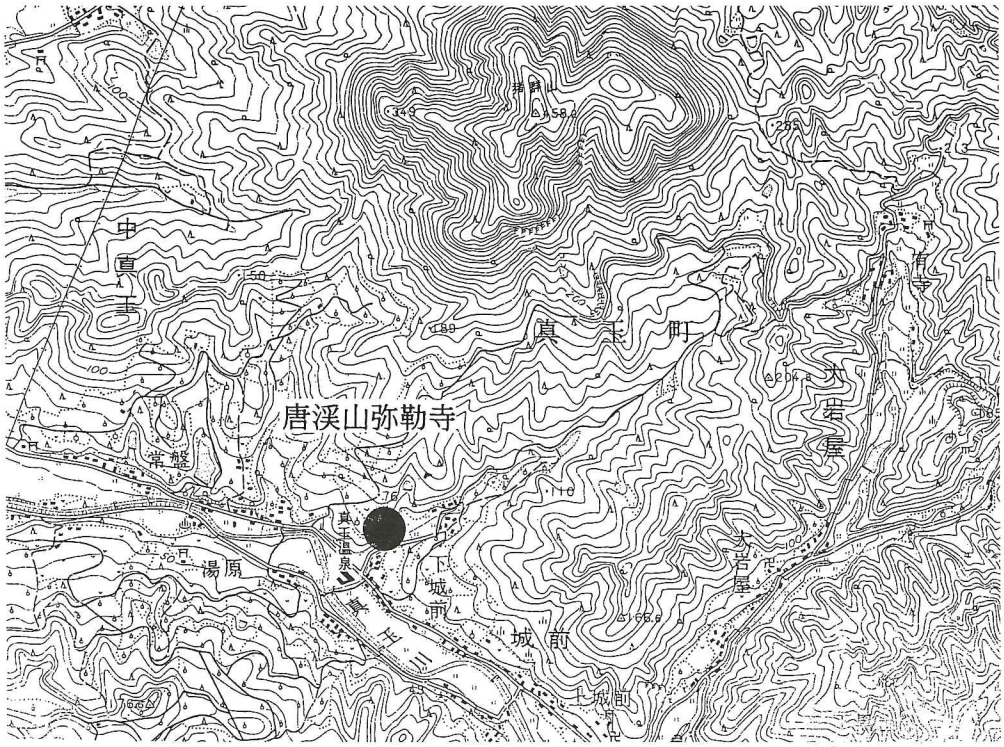
写真 29　寛政2年銘の盥盤

写真 30　天念寺境内の石塔

写真 31　文殊種子石碑
（正面および側面から）

7　唐渓山弥勒寺

真玉町下城前に所在する。真玉川に流れ込む西払川の右岸、猪群山から南に派生する低丘陵の裾部に立地する。近世の作といわれる仁安目録にその名を記すのみで、中世の文献に言及のない寺院である。18 世紀初頭には弥勒寺の末坊として谷之坊以下５坊を有していたが、その後半には「応暦寺末寺無住」と記されたように寺勢を失っていたらしい。もっとも明治 37 年まで鬼会が行われており、鬼会の経巻と鬼面（４面）が堂宇に保管されている。



第 10 図　弥勒寺位置図

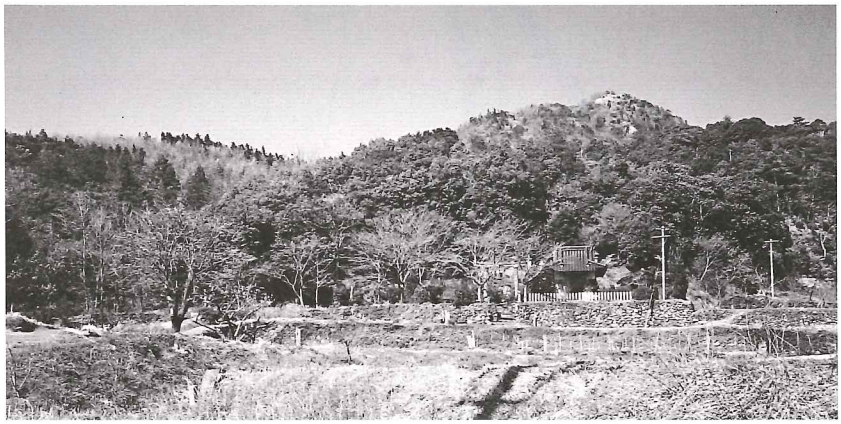
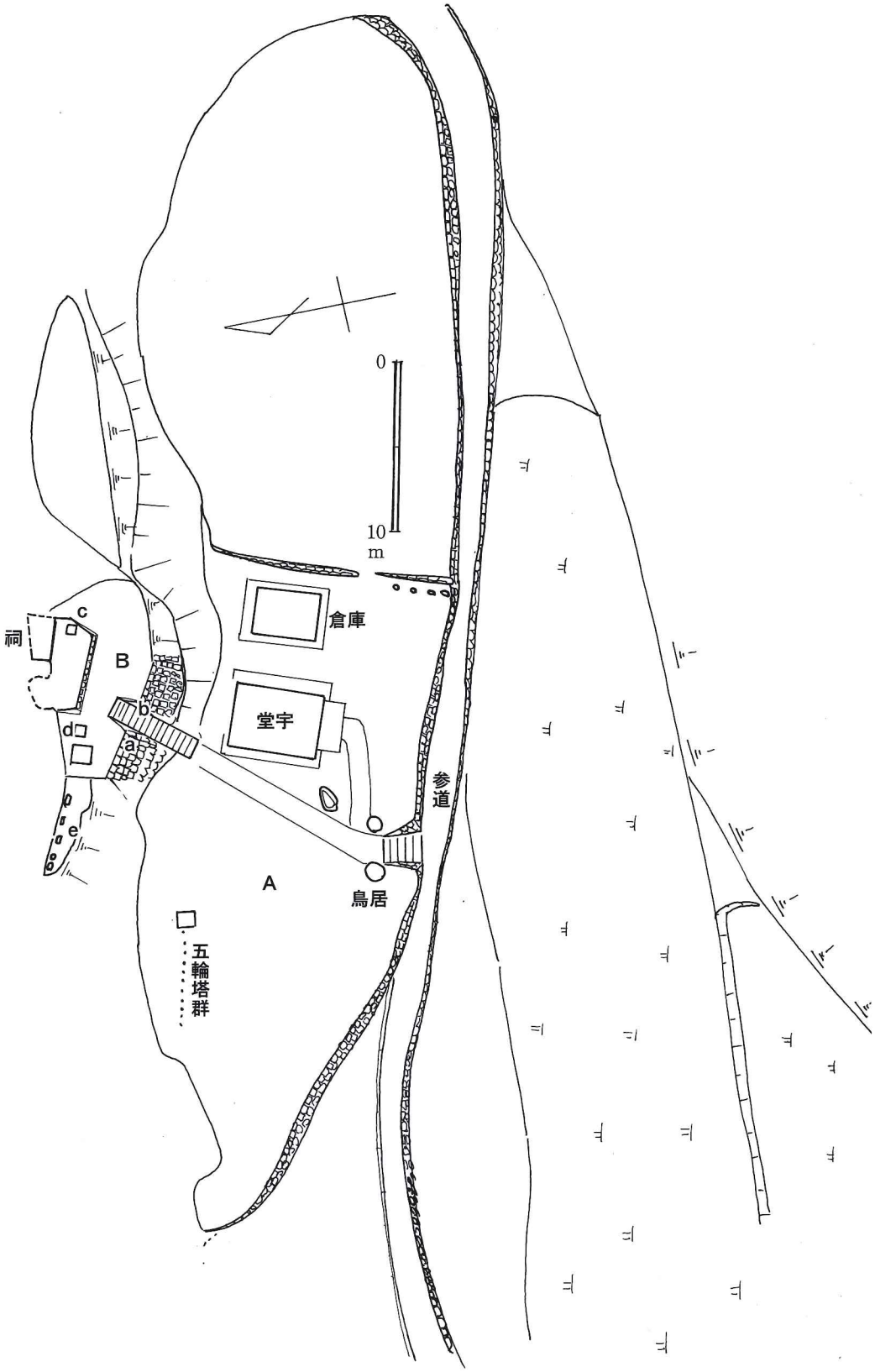


写真 32　弥勒寺遠景



第 11 図　弥勒寺境内実測図

伽藍

弥勒寺の周辺は、近年行われた西払川の河川改修工事によって改変を受けている。新しく作られた参道を進むと石垣普請の境内地に着く。短い石段を上り三社大権現の鳥居を潜ると、平場の境内（A）である。さらに前進し石段を上りきると幅10ｍ、奥行き5ｍの平坦地（B）が造られている。一段小高くした壇の奥に小規模な岩屋と小祠が設けられており、木製神像を安置している。これが三社権現である。三社権現の平地は切石の石垣で作事され、このうち登り口の隅石（a、b）に銘文が刻まれている。B区には石灯籠（c）、宝篋印塔（d）、一石五輪塔、石塔があり、さらに崖面にも墓碑や石像等（e）が据えられている。A区の隅に12基の五輪塔が並べられており、近隣から集められたものという。

現在の境内地には、堂宇と倉庫の建物しか建っていない。前者は昭和50年に建立したもので、堂内に弥勒菩薩と脇侍の不動明王、毘沙門天、観音菩薩を安置している。現状で、弥勒寺の境内地を見るかぎり、本寺の規模は甚だ小さいものである。三社権現の岩陰もささやかなものであり、他の六郷山寺院に漂う山岳寺院の雰囲気を著しく欠いているように思われる。本寺が、六郷山に関係する中世の諸記録に全く登場しないことも、たまたま記録に漏れたからということではなさそうである。弥勒菩薩を本尊としているのも、他の六郷山寺院と比較すると特異である。

写真 33　弥勒寺堂宇

写真 34　堂宇内の仏像

写真 35　弥勒寺三社大権現
の鳥居

写真 36　境内の五輪塔

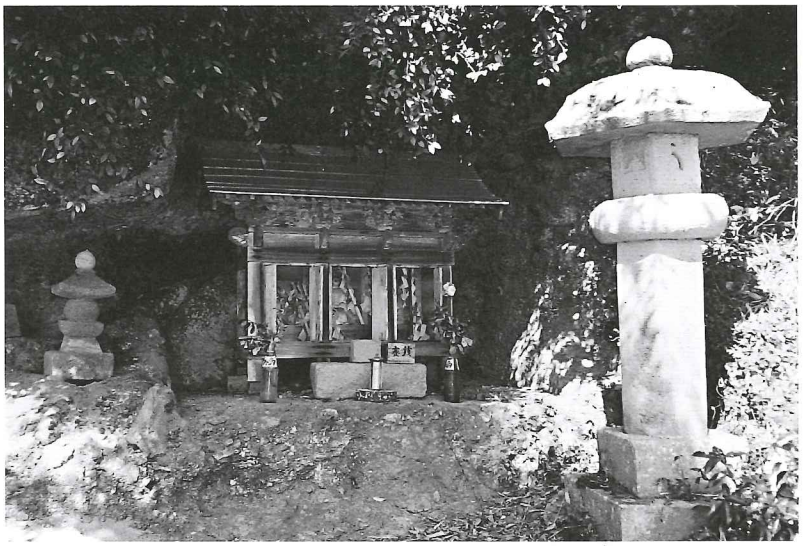


写真 37　三社権現全景

写真 38　三社権現の石造品

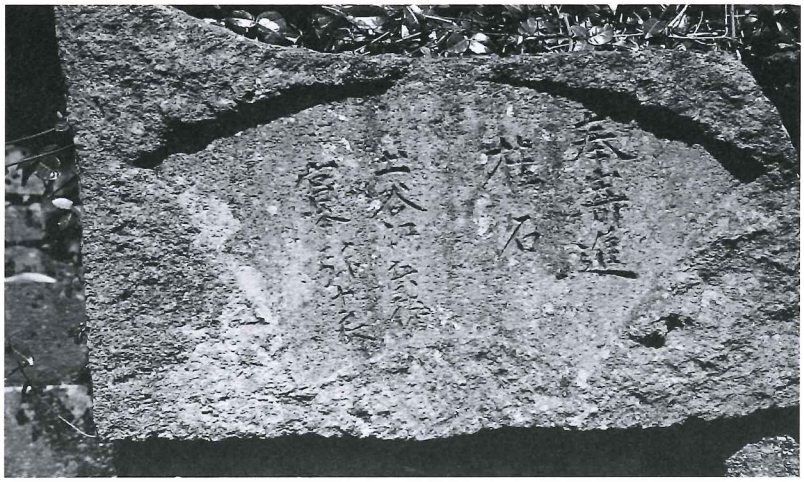


写真 39　銘文の刻された石垣

写真 40　石造神像

写真 41（左）
墓碑

写真 42（右）
宝篋印塔

第３章　調査成果と課題

（１）六郷山研究についての１、２の論点

１　はじめに

国東半島に所在する天台宗寺院を総称して、「六郷山」あるいは「六郷満山」（以下では、六郷山と称することにしたい）と呼ぶ。これら六郷山に属する諸寺は、両子山を中心として放射状に広がる半島の谷々に所在し、平安時代以後独特の仏教文化を開花させたといわれ、多くの仏像や石造物などがいまも残されている。

こうした六郷山の歴史については、これまでに中野幡能氏[(1)]や飯沼賢司氏[(2)]の研究あるいは大分県教育委員会による「六郷満山総合文化財調査[(3)]」、元興寺文化財研究所の「国東仏教民俗緊急調査[(4)]」、そして当館による「六郷山寺院遺構確認調査[(5)]」（以下、本調査と呼ぶ）などによって、解明が進められてきた。以上のような六郷山の研究史について、ここで詳細に検討することはできないが、これらの諸研究は鬼会などの祭礼や民俗事例の調査などを除けば、古代・中世の歴史を解明することに重点が置かれてきた。

古代・中世の六郷山の歴史については本山・中山・末山の３つのグループから成り、もともとは宇佐宮弥勒寺の僧侶らの修行の場として所在したが、12 世紀に比叡山に寄進され天台末となり「六郷山」という集団として成立したこと、その後も長安寺蔵の木造太郎天像や銅板法華経の製作にも宇佐宮の神職らが関与したことがわかり、宇佐宮と六郷山は決して排他的な関係ではなかったが、13 世紀前半には宇佐宮と六郷山の対立が見られるようになり、六郷山は「関東祈祷所」となって、宇佐宮からの「自立」を行ったこと、などがこれまでの飯沼賢司氏などの研究[(6)]によって明らかにされている。

本章では、こうした従来の研究をうけ、六郷山研究の深化にむけて、2 点の課題について触れることとしたい。その１つは、現在六郷山とされる寺院がどのような過程を経て、組織化されたのかという課題である。すなわち、六郷山と把握された寺院の変遷について、平成４年度から実施してきた本調査の成果をふまえ、検討を加えることとしたい。そして、いま１点としては、これまで研究の少なかった近世六郷山について、どのような研究視角が所在するのかを提示することとしたい。

２　二つの目録と一つの注文

（１）問題の所在

上述したように、古代･中世の六郷山の歴史については明らかにされつつあるが、３つのグループから成る六郷山は地域的に見ると宇佐を基点にして遠くなるにつれて、本山→中山→末山と編成され、中野幡能氏らはかかる状況から、本山から末山へという時代的展開を想定されている[(7)]。しかし、六郷山の拡大という時、その要因はいかなるものであるのか、また六郷山として組織化された寺院が元来どのような性格の寺院であるのかを検討していくことは重要な課題といえる。

ところで、六郷山に関する諸史料には、古代から中世にかけての、いわば六郷山のリストともいうべき史料がいくつか所在する。なかでも、六郷山研究において広く知られた史料としては、次の３点

の史料を挙げることができる。すなわち、「仁安三年六郷山二十八本寺目録」、安貞２年（1228）の年紀を有する「六郷山諸勤行并諸堂役祭目録案」（以下、「安貞目録」と呼ぶ）、建武４年（1336）の年紀がある「六郷山本中末寺四至注文案」（以下、「建武注文」と呼ぶ）である。(8)

上記の３点の史料の中で、「仁安目録」については、小泊立矢氏が検討を加えられ、氏は次のような論点を示された。(9)

①この目録は、山号寺号で統一した記載となっているが、余瀬文書などの六郷山に関わる一次史料などでは、古代末から中世の六郷山は、基本的に「～岩屋」、「～山」である。

②六郷山において、山号寺号による記載が見られるのは16世紀半ば以後である。

③それゆえ、この目録は16世紀半ば以後の作であることが推察される。

④ただし、その作成時期については、今後の多面的な検討に委ねられるところが多い。

この小泊氏の研究は六郷山研究において重要なものであり、今後継承すべき研究といえる。(10) そこで、改めて上で触れた３つの史料を見ると「安貞目録」→「建武注文」→「仁安目録」という順に六郷山とされた寺院の数が増えているのである。

そこで、本節では六郷山とされた寺院の増加をめぐって、まず「安貞目録」と「建武注文」の位置付けを確認し、次にその要因などについて検討することとしたいが、このことは現在六郷山と把握される寺院をもって、12世紀段階から国東半島全体に六郷山寺院が点在したと見なし、当該期の国東仏教史を一元的に六郷山のみで説明することの可否を改めて検討することでもある。ただし、紙数の都合などもあり、ここでは問題の提示にとどまらざるを得ないことをあらかじめお断りしておきたい。

（２）「安貞目録」と「建武注文」

六郷山のリストともいうべき２つの目録と１つの注文については、前で触れた小泊氏の研究をふまえると、ひとまず「安貞目録」→「建武注文」→「仁安目録」という編年となる。これらの史料の記述のなかで注目されることは、例えば富貴寺あるいは最古の紀年銘を持つ国東塔の所在する岩戸寺は「安貞目録」に見えないこと、本年度の調査対象寺院である平等寺（国見町）には11世紀の釈迦三尊像が残されているが、これも「安貞目録」にはなく、これらの寺院は「建武注文」にはじめて登場することである。すなわち、実際に寺院を調査した時、「安貞目録」以前に遡る仏像や石造物などが所在する寺院が検出されるが、その中には富貴寺や平等寺などのように「建武注文」以後にしか六郷山として把握されない寺院も所在するのである。

このことは一体何を意味しているのだろうか。１つには、現存する「安貞目録」は写本であり、書写の過程で脱漏などが起きたと考えることもできる。「安貞目録」については、既に新川登亀夫氏の研究があるが、氏は「安貞目録」が複数の文書から成り、各寺院で執行された法会についての部分と「安貞二年五月」の日付部分とは異なる文書であることを指摘されている。(11) 詳細な分析については氏の研究を参考にしていただきたいが、かかる指摘をふまえた時、「安貞目録」に記されている寺院群については、書写の過程で漏れたものとも想定できるだろうし、そもそもこの寺院群自体が安貞段階の状況を示すものかについても疑義が生まれることになろう。

そこで留意したいことは、小泊氏が「仁安目録」を検討された折に示された六郷山に属する寺院の

呼称の問題である。これをふまえて改めて「安貞目録」と「建武注文」を見ると、前者に記載された寺院は基本的に「～岩屋」あるいは「～山」などと記され、それらは後者においても踏襲されている。しかし、「建武注文」ではじめて登場する寺院には「～山」あるいは「～岩屋」という呼称のものはなく、「～寺」と記され、両者の間には明らかに呼称面でも差異が見られるのである。「～寺」という呼称は、平安時代に成立した六郷山においては、いわゆる本山に属する寺院（古代寺院の系譜をひくとも考えられるもの）を除いては見られないものであり、基本的に「建武注文」においてはじめて登場する寺院がかかる呼称であることは、それらが元来の六郷山ではなかったことを示すものと考えられよう。

また、「安貞目録」については、先に触れたように新川氏の研究で複数の文書が書写されたものとされたが、かかる文書が他の文書とともに「安貞二年」という年号で結び付けられていることは、ここに見える記載は「建武注文」以前の状況を示すものと見ることができるだろう。つまり、「安貞目録」は安貞２年の記録であるかどうかは問題があるにしても、相対的に見ると「建武注文」に先行する記録と位置付けられるのである。

一方、「建武注文」についても、詳細な史料批判は今後の課題とせざるを得ないが、ここで問題にしておきたいことは、かかる注文に示された六郷山認識は14世紀段階のものと見ることができる。すなわち、この史料には六郷山とされた寺院とその所領を押領した者が記されているが、そうした「押領者」の１人に「調幸実」がいる。この人物は富貴寺の所領の「押領者」として書き上げられているが、山口隼正氏の研究[12]によると文和２年（1353）に富貴寺を再興した「調行実」と同一人物である。この富貴寺の例などから、とりあえず建武４年という年号の可否はともかく、この注文は14世紀段階の状況を反映した史料と見ることができよう。

以上をまとめておくと、前でも触れた「安貞目録」→「建武注文」→「仁安目録」という編年は、特に前二者に記された年号が確かなものであるのかはなお検討されるべきであるにしても、相対的なものとして認められることを改めて確認しておきたい。

（３）「荘園の寺」と六郷山

さて、「建武注文」にはじめて登場する寺院について、さらにその立地などを検討すると、例えば平等寺は国見町大字野田に所在するが、この野田が弥勒寺領伊美荘の鎮守たる別宮八幡の氏子圏にあることは留意される。段上達雄氏が提示された、現在の氏子圏の相違は、中世の荘園あるいは開発主体の別につながるという見解[13]をふまえるならば、平等寺は伊美荘に所在した寺院ということになる。この平等寺以外にも「建武注文」では、荘園に立地した寺院を六郷山寺院として把握している事例を見つけることができる。例えば、妙覚寺は豊後高田市払田に所在したといわれるが、ここは弥勒寺領都甲荘に含まれる地である。あるいは、富貴寺についても、同寺はもともと宇佐宮大宮司の祈願寺とされた寺院であり、宇佐宮領糸永名のうちにある。いわば、これらは宇佐宮や弥勒寺の荘園に立地するもので、「荘園の寺」とも呼ぶべき存在である。

それでは、何故にこうした宇佐宮や弥勒寺の荘園内に所在する寺院が、六郷山として把握されるに至ったのだろうか。この問題を検討する前に、まずは富貴寺や平等寺といった「荘園の寺」の在り方

について見ていくこととしたい。

従来の国東半島における仏教史を通史的に見た時、特に古代から中世前半にかけては天台末である六郷山を取り上げ、14 世紀半ばから 15 世紀にかけて、田原氏の庇護の下で荘園に禅宗が流入してくると、禅宗が主として取り上げられてきた。つまり、これまで仏教史研究では禅宗が流入してくる以前の荘園の仏教に関する記述は、六郷山に代置されたままであり、禅宗以前の荘園の仏教についての検討がされていないのである。拙稿[14]でも指摘したが、禅宗以前の荘園ではやはり天台宗が所在したと推測される。平安時代の宇佐宮あるいは弥勒寺も延暦寺と関係があり、宇佐宮および弥勒寺自体も天台化していたことが指摘されており、その荘園には天台宗が流入していたと見られるのである。すると、13 世紀半ばから 14 世紀半ばの間で六郷山とされた寺院の数が増えていることは、同じ天台宗寺院であった「荘園の寺」を六郷山として把握したことが想定できる。

富貴寺の歴史を取り上げられた海老澤衷氏は、「建武注文」ではある特定の者たちを「押領者」としているが、むしろ六郷山側が押領者であったのではないかと述べられている。[15]前で触れたように、六郷山と把握された寺院の数が増えた時期は、六郷山が「関東祈祷所」となり宇佐宮から自立した後であり、その要因については、海老澤氏も推察されているように、六郷山による「押領」ということが考えられるのである。

この「押領」は、「建武注文」以前のいわゆる鎌倉時代後半に展開したと見られるが、その具体相は文献上なお詳らかでない。それゆえ、六郷山の「押領」という時、それは所領の拡大という現象よりもむしろ「荘園の寺」などを六郷山として把握し、「押領」の中心は寺院自体にあったのだろう。確かに、富貴寺は六郷山として把握されるに至るが、同寺が所在する糸永の谷全体が六郷山領とされたわけではないし、同じく六郷山とされた妙覚寺のある都甲荘も六郷山領とはなっていない。すると、次に問題となるのは、こうした「押領」の要因がいかなる背景によるものかという点である。1つには、宇佐宮による荘園支配の後退も挙げられよう。そして、いま1つには前述したように、六郷山が「関東祈祷所」となったことが想定される。「関東祈祷所」たる六郷山は、国東半島における1個の在地勢力として組織の拡大を企図したとも考えられ、そこでは所領の拡大という面的な形ではなく、同じ天台宗寺院である信仰の場を「関東祈祷所」として加えていく形がとられたのではないだろうか。鎌倉時代の六郷山については、政治面などからの考察も求められるが、ここでは六郷山の拡大という現象が鎌倉時代後半に展開したことを指摘しておきたい。なお、この点に関連して、「建武注文」にはじめてその名が見え、15 世紀には曹洞宗寺院として再興された護国寺（現護聖寺）の存在が注目される。すなわち、同寺は東国東郡安岐町大字朝来に所在するが、この地は宇佐宮領安岐郷に属した朝来野浦の故地であり、護国寺は荘園内に立地する寺院であった。創建時期は不詳であるし、同寺は前述したように一度廃絶し、さらには昭和の火災によって本堂を焼失していることから、中世の姿を知ることは難しいが、同寺境内には正応 4 年（1291）という県内最古の紀年銘を持つ板碑が所在する。同寺が当初から「護国寺」という名称であったのかも不詳ではあるが、その名称がここでは留意される。すなわち、これは「異国降伏祈祷」に関わるものとも見られ、かかる名称の寺が荘園内に立地することは、鎌倉時代後半の六郷山の歴史においてはいわゆる「異国降伏祈祷」が大きな意味を有していたことが窺えるし、六郷山の拡大は「異国降伏祈祷」が1個の要因として所在したことの傍証となるので

はないだろうか。

以上述べてきたことは、今後検証されていくべきものであるが、この「建武注文」は鎌倉時代後半の六郷山の拡大という事象を窺わしめるものといえよう。こうした「建武注文」と「仁安目録」の記載を比較すると、「建武注文」と「安貞目録」に見られるような寺院数の増加は見ることができない。確かに、「建武注文」には見られず、「仁安目録」のみに見られる寺院もある。例えば、「仁安目録」に見える浄土寺は、「建武注文」では「行入寺末寺」とあるように、「建武注文」段階である寺の末寺であったものを独立させた形で「～寺」とするものが多い。また、「仁安目録」には、既に他宗となっていた護国寺や妙覚寺などを記している。このことは、この目録が16世紀半ば以後の事実を反映するものではなく、何らかの過去の記録、すなわち「建武注文」などをもとに作成されたことを示唆するであろうし、さらに言えば、六郷山の縁起とも呼ぶべき記録であることを物語っているであろう。

（4）「山の寺」と六郷山

前項では「荘園の寺と六郷山」として、鎌倉時代後半に六郷山の拡大という現象が見られ、これは「異国降伏祈祷」が背景にあると推測できることを述べてきた。さらに、そこでは荘園に立地した寺院を六郷山として組織化していく動きを指摘したが、同時に鎌倉時代後半の六郷山の拡大という現象は先に触れた岩戸寺などの山間に位置する寺院の組織化という動きも所在した。

上では岩戸寺をまず例として挙げたが、この他にも「建武注文」にはじめて登場する「山の寺」とも呼ぶべき山間の寺院としては、成仏寺や文殊仙寺あるいは今年度の調査対象である虚空蔵寺がある。[16] これらの寺院をあえて「山の寺」と呼んだのは、現在の氏子圏等を見ても荘園内に位置するものでない寺院ではあるが、平安時代の史料などには見えず、「建武注文」によって初めて六郷山として把握され、かつ「～寺」という呼称にある寺院を明確に峻別するためである。ただし、岩戸寺は弘安6年(1283)の国東塔や12世紀の薬師如来像を蔵しているし、詳細な調査報告は第2章を見ていただきたいが今年度調査を実施した虚空蔵寺も岩窟があり、12世紀段階のものと見られる焼仏などが所在し、山岳修行の場であったことが窺える。つまり、これらの「山の寺」も「安貞目録」以前の信仰遺物を伝えていながらも、六郷山として把握されるのは「建武注文」以後のことなのである。

ただ、ここで留意しておきたいことは、岩戸寺にしても成仏寺にしても、「山の寺」のなかでも、いわば有力寺院と見なされるものは、国東半島のなかで唯一の国衙領であった国東郷に隣接する地にあることである。確かに、国東郷に隣接する寺院でも大嶽寺社（現神宮寺）や見地山（現東光寺）は「安貞目録」段階で六郷山とされている。この両者の差異を細かく追究していくことは史料的にも難しいが、より重要なことは、国衙領国東郷が所在した国東半島の北東部、すなわち宇佐から見た時遠距離に位置する地などでは、虚空蔵寺に端的に示されるように山岳修行の場として平安時代から所在したとしても、直ちにそれが六郷山として組織化されたとは見られないことである。さらに言えば、このことは現在六郷山として所在する寺院すべてが、12世紀の天台末とされた段階から六郷山寺院として組織化されたわけではないことを示しているだろう。

ここで改めて小泊氏の研究を引用するならば、氏が指摘した平安時代の古文書などの一次史料では六郷山とされた寺院は「～山」あるいは「～岩屋」という呼称であったことは重要な指摘である。12

世紀段階で天台末となり、六郷山として組織化された寺院はまさにかかる呼称が端的に示すように山岳修行の場であったことを本源的な姿として認識することができる。その中心となった地域は、宇佐に近い国東半島の西から南西部であったと見られ、これは六郷山自体が宇佐宮と密接な関係を有したという性格に基づくものと考える。そして、六郷山は13世紀になって、「関東祈祷所」として宇佐宮から自立した形をとることになり、国東半島における1個の在地勢力として、国東半島に点在した山岳修行の場あるいは荘園に位置した寺院を末寺化したと想定されるのである。「建武注文」はそうした六郷山の拡大を示す史料であり、かかる中世の六郷山の歴史をふまえた上で成立するのが「仁安目録」であると位置付けられよう。

これまで国東半島の仏教史という時、例えば古代・中世については六郷山さらには宇佐宮との関わりで論じられることが多かった。しかし、これまで見てきたように、六郷山が12世紀段階から国東半島全体をカバーしたものでないことが想定されることは、12世紀から13世紀段階の国東半島の仏教史を六郷山あるいは宇佐宮との関係だけでなく、より多面的ー特に東国東については、例えば瀬戸内海を通した中央との関連ーに検討していくことを提起しているであろう。また、そこでは国東半島をまるごと1つの地域として見なすのではなく、西国東と東国東さらには荘園ごとといった、様々な地域設定を行い検討を加えていくことが求められるように思われるのである。

3　近世六郷山研究の視角について

（1）六郷山研究と近世仏教史研究

次に2点目の課題について述べていくこととしたい。これまで近世の六郷山については、中野幡能氏による「峯入り」の再興に関わる研究などを除くと、正面から取り上げた研究はほとんどない。近世仏教や寺院に関する研究が，中世のそれに比してあまり活発でないという状況は、六郷山に限ったことではなく、近世仏教史研究全体の傾向ともいえる。ここで戦後の近世仏教史研究の傾向を端的に示した一文を紹介することにしたい。(17)

> 近世の仏教は、幕府の宗教支配のための寺院本末制と、キリシタン禁制のための寺請制とによって、幕藩権力による完全な統制と過保護を受け、そのためいたずらに安逸・徒食を貪り、虚脱と形骸化のうちに俗化して、古代・中世にみられたような活力と精彩を失い、やがて各方面から相ついで投ぜられた仏教無用論や排仏論に身をさらして、退廃と堕落の一途をたどったという歴史像がほぼ通説として定置されている。こうした歴史像は直接間接、これまでながく日本仏教史研究の本流を形成してきた辻善之助の、開拓者かつ古典的業績に胚胎しているが、そこでは仏教と政治との関係に中心がおかれ、仏教と社会との関係はせいぜい政治との関係を通して外側から見られるにとどまり、社会そのものの側から見ることは必ずしも重視されなかったし、また近世と前代との歴史的社会的条件の相違を無視して、およそ宗教とはかくあるべきものという先取りされた一定の理想型に照らして、近世仏教は価値の低いものという一種の先入観に支配された傾きなしとしない。

これは1975年に発表された竹田聽洲氏の論文「近世社会と仏教」（『岩波講座　日本歴史』近世1）

の一節であるが、六郷山研究においても、かかる近世仏教認識が色濃く影を落としているように思われる。国東半島独特の「国東塔」などの石造物や熊野磨崖仏など、半島独自の仏教文化を生み出した古代末から中世は、まさに六郷山が「活力と精彩」をはなった時代として様々な研究が行われきた。

しかし、より重要なことは、かかる文化財なども含めて六郷山が現在まで存続してきたことの意義を問うべきであろう。廃寺となったものもあるが、独特の仏教文化を開花させたと言われる六郷山がいまも所在し、様々な文化財を伝えてきたことを可能にした条件を解明することは重要である。さらに、寺院は人々の信仰によって支えられるものであることをふまえた時、やはり今後の研究においては、各時代を取り上げていくことが求められる。平成４年度から実施している本調査は、六郷山の遺構を確認・記録していくことを１つの目的としているが、そのなかで六郷山の現況を観察した時、中世石造物とともに、それ以上の近世石造物を確認することができる。つまり、現在の六郷山を見た時、それは近世以後の変遷や整備を経たものであることが窺えるわけであるし、多くの近世石造物は近世以後も六郷山が信仰の場として所在したことを示している。

このように六郷山の現況には「近世以後の姿」が少なからず所在しているから、六郷山研究においては近世以後を対象としていくことは不可欠の課題となる。近世仏教は寺檀制などのソフト面において、現代仏教の直接的な淵源と位置付けられており、特に六郷山の近世を解明していくことは重要な課題といえる。

（２）近世六郷山研究の諸課題

それでは、近世六郷山研究においては、どのような課題が考えられるのであろうか。

まず１点目としては、中近世移行期の六郷山の在り方を検討することが挙げられる。

中世後半の六郷山は実質的には吉弘氏が支配したが、文禄２年（1582）の大友氏除国に伴い吉弘氏が没落した後、17 世紀初頭に至るまでの六郷山の動向を可能な限り検討していくことは必要である。また、智恩寺（現豊後高田市）は文禄元年（1581）の朝鮮出兵では大友氏の軍団の一翼を担ったことが知られ、この時点では１個の領主勢力として所在したが、近世には住持もいなくなり、「寺院」として把握される施設ではなくなっている。[18]

中近世移行期の六郷山においては、智恩寺のように廃絶したもの、あるいは一度廃絶しながらも近世に再興されたと伝える寺院もある。ここで注目したいのは後者の寺院であり、そうした再興がどういった者によって行われたかである。例えば、平成７年度に本調査が対象とした報恩寺（現武蔵町）は、「寺院明細牒」によると、元和年間に「可春上人」が再興したとある。その住職墓地を見ると、寺が所在した麻田村の庄屋綾部氏の墓地と連続している形態にある。いわば，住職墓地が独立した形態ではなく、所在する地の庄屋など有力者の墓地と連続して所在する形をとっているのである。[19] かかる例は岩脇寺（現豊後高田市）でも見ることができ、[20] 住職墓地の形態から近世初頭の中興は所在する地の有力者と密接に結び付いていたこと－例えば中興した僧が有力者の家の出身など－が想定できよう。このように中近世移行期の六郷山については、「連続と断絶」という視点から，政治面また寺院の消長などについて、文献をはじめ諸資料をもとに検討を加える必要がある。

２点目としては、六郷山に属す各寺院が所在するムラとどのような関わりを持っていたかを明らか

にすることである。近世寺院とムラとの関係は、寺院がムラの規制を受けることもあり、双務的な関係にあったと見られる。これは近世寺院全体に関わることであるが、例えば、実相院の住職の交替にあたっては、寺院単独で決定するのではなく、檀家の承認を必要としたことはその一例であろう。[21] あるいは、近世寺院はムラにおいて、相論の調停など「公共的役割」を有したことも最近明らかにされてきており、[22] こうした近世寺院とムラとの関係を様々な面から検討する必要があろう。ただし、この点については六郷山の各寺院に残された文献史料では限界があり、ムラに残された文献史料を活用することも不可欠となるだろうし、文献だけでなく祭礼などにも目を向けることが必要となる。

３点目としては、縁起の整備が挙げられる。つまり、近世に作成された六郷山の縁起としては宝暦２年（1752）の「六郷満山開山仁聞大菩薩本記」（両子寺蔵）[23] が知られているが、これらと『八幡宇佐宮御託宣集』等の中世の記録に見える縁起とを比較することで、近世になって縁起がどのように整備されたかを検討することは重要であろう。縁起は、その寺院の由緒を示したもので、社会とのつながりの中で、寺院が「信仰の場」としていかに霊験あらたかな地であるかを伝える媒体となるものである。それゆえに、縁起の整備は寺院の存立に大きく関わるものと見られ、これを検討することは縁起整備の背後にある近世以後の六郷山の歴史を解明することにつながるものといえる。

４点目として挙げられるのは、幕藩権力との関わりを検討することである。近世には両子寺が杵築藩主松平氏の菩提寺とされ、六郷山の中心と位置付けられた。こうした両子寺をはじめ、六郷山は幕藩権力とどのような関係を具体的に切り結んだのか明らかにする必要がある。近世寺院は幕藩権力の統制を受けたことは事実であり、六郷山においてもこの面についての検討が求められるであろう。

５点目としては、近世石造物や仏像の調査である。中世のそれらについての調査は進んでいるが、近世石造物については、石造仁王像に関する渋谷忠章氏の研究[24]や以前に当館で実施した石工調査、[25] 各市町村史における石造文化財の所在調査の他に、調査研究はほとんどない。あるいは、近世の仏像についても、前述した石工調査で注目された「板井仏師」の作については検討が加えられているが、それ以外については本格的な調査はなされていないし、無銘の仏像についても「板井仏師」との関連で抑えていくことも重要であろう。

以上で挙げた諸課題をはじめ、近世六郷山研究においてなお留意すべきことは、一口に近世と言っても260年ほどの期間があり、そこにはいくつかの画期が所在したと見られることである。近世の六郷山という時、そこには単一の起伏のない歴史が所在したわけではなく、いくつかの起伏があったと見られ、その様相を多様な側面から明らかにすることも求められるであろう。また、近世六郷山研究は国東の仏教史研究にもつながるものであり、六郷山だけでなく、国東半島の近世仏教についても検討していくことも必要であろう。例えば、上で見た１・４・５の諸点などは、特に近世国東の仏教史研究にも共通する課題であり、これらの検討については今後の大きな課題として残されている。

註

（１）　中野幡能『八幡信仰史の研究（増補版）下巻』第５章（吉川弘文館　1975年）

（２）　飯沼賢司「文書から見た六郷山の様相-六郷山の成立-」（『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』　大分県立宇佐

風土記の丘歴史民俗資料館　1993年)、同氏「古代の衰退と中世の台頭」(『豊後高田市史』　豊後高田市　1998年)など。

(3)　『六郷満山関係総合文化財調査概要1～3』(大分県教育委員会　1976、1977、1982年)。

(4)　『国東仏教民俗文化財緊急調査報告書』(元興寺文化財研究所　1981年)。

(5)　『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ～Ⅶ』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1993～99年)。

(6)　前掲註(2)。この他に六郷山の歴史については『豊後高田市史』(豊後高田市　1998年)に多面的な考察が加えられている。

(7)　前掲註(1)など。

(8)　この他に六郷山のリストとも呼ぶべき史料は、弘安7年(1284)の「六郷山異国降伏祈祷巻数目録写」や嘉元2年(1304)の「六郷屋山例講谷役配分注文」などがあるが、ここではより六郷山の全体を知ることのできる3つの史料に分析対象を絞ることとした。

(9)　小泊立矢「旧仏教の動き」(『大分県史　中世篇Ⅰ』第6章　大分県　1982年)。

(10)　小泊氏が今後の課題とされた「仁安目録」の作成年代の詳細な分析は難しい。なぜなら、この史料は『太宰管内志』に引用されたものであるが、注の部分に掲載されており、その出典あるいはいかなる形式の記録であるのかが不明であることに拠る。つまり、文献からはその作成年代を追跡する手がかりがほとんどなく、むしろ中世段階の経典の奥書や仏像などの銘文から、「仁安目録」に記されている寺号がいつ頃から使用されたかをおさえていくことが1つの方法として挙げられる。ただし、「仁安目録」に見える六郷山認識は、すぐれて中世末から近世のものであり、後述する近世六郷山研究においても、幕藩権力との関わりあるいは『豊鐘善鳴録』などに見える六郷山認識などもふまえながら検討すべき史料である。

(11)　新川登亀夫「『豊後国六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』について」(『六郷満山関係総合文化財調査概要3』　大分県教育委員会　1982年)。

(12)　山口隼正「筑後木屋氏と富貴寺」(『日本歴史』435　1984年)。

(13)　段上達雄「村落と信仰」(『豊後国田染荘の調査Ⅰ』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986年)、同氏「村落構造と信仰」(『大分県地方史』107　1982年)。

(14)　櫻井成昭「調査のまとめ」(『豊後国香々地荘の調査　本編』　大分県立歴史博物館　1999年)。

(15)　海老澤衷「富貴寺の歴史」(『富貴寺』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1984年)。

(16)　「安貞目録」には「虚空蔵岩屋」とあり、一方で「建武注文」にも「虚空蔵寺」とある。これまで両者は同一のものとして扱われてきた。しかし、前者は記述が長岩屋(現豊後高田市)と黒土岩屋(現真玉町)の間に見られることから、豊後高田市大字加礼川に所在し、虚空蔵菩薩を祀る現在の三島社を指すものと考える。また、本文でも触れたように、「～岩屋」と「～寺」という記載の相違は、これら2つの寺院が別個の寺院であることを示すものであり、中世国東半島には現在の豊後高田市と国東町に2つの虚空蔵を祀る寺があったと見られる。それでは何故に前者が「建武注文」で見られなくなるのかは、なお検討すべきであろう。

(17)　近年は「身分集団論」を視野に入れた澤博勝氏による新たな視点からの研究もある。氏の研究は『近世の宗教組織と地域社会』(吉川弘文館　1999年)としてまとめられている。

(18)　『智恩寺』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1992年)。

(19)　『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1996年)、原田昭一「豊後国における「配石墓」終焉の一様相」(『研究紀要　Ⅹ』　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1997年)。

(20)　前掲註(18)報告書。岩脇寺を中興したという浄眼上人の墓碑が伊美家墓地に所在する。

(21)　櫻井成昭「護聖寺蔵文献資料の調査」(『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅴ』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民

俗資料館　1996年)。
(22)　斎藤悦正「近世社会の「公」と寺院」(『歴史評論』587　1999年)。
(23)　『寺社縁起』(日本思想大系　岩波書店　1972年) に収載されている。
(24)　渋谷忠章『大分の石造仁王』(1980年)
(25)　『国東半島の石工　1・2』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1983・84年)。

(櫻井成昭)

（2）六郷山寺院と仏像ー本年度調査寺院を中心にー

仏像は、もちろん礼拝の対象として造立されるものであるから、それが安置される寺院における信仰の内容を具現したものにほかならない。また、既に失われたものはともかくとして、幸いにして遺された仏像の製作年代は、その寺院の一つの画期がその時期にあったことを示していると考えられる。このことは、六郷山諸寺院にあっても同様であり、各寺院に伝えられた仏像が、その創立や盛衰、再興などの歴史的背景を背負っているのは当然であろう。

以下、ここでは本年度調査対象寺院である７ヶ寺のうち、その寺跡・遺構すら確認できない２ヶ寺を除く５ヶ寺について、仏像の遺存状況を報告し、それらの各寺院の変遷史における意義を考えたい。

（1）天念寺　豊後高田市大字長岩屋

豊後高田市の東部、都甲地区を東から西に貫流する都甲川の支流長岩屋川の谷筋に位置する長岩屋山天念寺は、史料の上では「長岩屋」の寺院名で記され、少なくとも平安後期の 12 世紀後半には既に存在し、鎌倉時代以降の中世には惣山屋山寺（現長安寺）と並んで六郷山中山本寺の中では中枢をなす寺院であった。ただ、現在の本堂・講堂および鎮守である身濯神社からなる境内域は本来の寺域の中核部分にすぎず、もとは長岩屋の谷筋全体にわたる坊集落を形成していた。

この天念寺に遺存する仏像としては、現本堂須弥壇に安置される５躯の平安仏のほか、同次の間に２躯、講堂に２躯の近世仏がある。

（本堂須弥壇）

① 伝釈迦如来坐像　樟材一木造、像高 93.0

② 伝日光・月光菩薩立像　檜材一木造、像高 97.2、87.9

③ 伝勢至菩薩立像　樟材一木造、像高 97.5

④ 吉祥天立像　榧材一木造、像高 109.0

これら５躯のうち、髪型や着衣からそれとわかる吉祥天像以外は、いずれも両腕・手先を失うため尊名が不明瞭である。現在本尊として安置される伝釈迦像は、その両肘のかたちから定印の釈迦か阿弥陀如来と考えられ、頭部の小粒の螺髪、ふくよかな丸顔に撫で肩で、肉取りの薄い体部や膝の造形は平安後期も 12 世紀の特徴を示している。次に、この本尊の脇侍となっている伝日光・月光菩薩像は、その尊名からは本来薬師如来の脇侍であるべきで、樟と檜という材の違いや抑揚のない彫り口など、本来一具のものとは考えられない。むしろ、勢至菩薩と伝える像の方が、本尊と同じ樟材を用い、合掌手を思わせる両肘のかたちや浅彫りの瀟洒な彫り口など本尊と同工であり、本来は阿弥陀、観音・勢至の阿弥陀三尊の中尊と右脇侍であった可能性が高い。

以上ここには、少なくとも阿弥陀三尊、薬師三尊の２組の三尊仏と吉祥天の平安仏が存在したことを窺わせる。いずれも平安前期以来の一木彫成像の伝統的技法に拠りながら、和様彫刻の温稚な作風を示し、12 世紀六郷山仏師工房の在り方を知らせてくれている。

六郷山寺院「長岩屋」の初見は、長承４年（1135）の「夷住僧行源解状案」（余瀬文書）に「屋山」

以下８ヶ寺の中山寺院として記され、その順位からは屋山に次ぐ寺格を有していたと考えられる。これら天念寺の平安仏は、まさにこの期の長岩屋に造立されたもので、同寺の一つの画期がこの頃にあったと見て間違いない。

その後、鎌倉前期の安貞２年（1228）、長岩屋は他の六郷山寺院とともに鎌倉幕府に目録を提出し、諸法会の執行次第を報告している（『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』長安寺文書ほか）。これによれば、長岩屋の本尊として「観世音菩薩」があげられるほか、「月並薬師講」「同観音講」や「不動行法」が修されていたことがわかる。このうち観音と不動は不明だが、薬師については上記日光・月光菩薩を残す薬師三尊が該当するのであろう。

（本堂次の間）

⑤ 千手観音菩薩立像　樟材一木造　像高 121.0

⑥ 如来坐像残欠　檜材一木造　像高 64.5

⑦ 不動明王立像　檜材寄木造　像高 87.5

いずれも江戸時代の造像になるものであるが、３躯とも以下のような造立銘があり注目される。

＜千手観音蓮華座底面墨書銘＞

大願主　村司山口忠兵衛尉

天念現住法印圓清

安永七戊戌星

奉造立千手観世音御尊像

仲冬恵日定未

佛子　夷村板井甚蔵國芳

随喜者　當村土谷六右衛門尉

＜如来像台座墨書銘＞

佛工

安永八己亥□　夷村□□□□

奉造南無阿弥陀佛□□

弥生吉祥日　□住持□□□□

當所施主明石□□□□

＜不動明王背面陰刻銘＞

萬治二年　□□

□□祇□住□□　造立主為□□樂也

このうち、萬治２年（1659）造立の不動明王像は、伊藤常足の『太宰管内志』（天保７年・1836 刊）に「今の本尊は不動明王なり」とあるのに該当しよう。安永７年（1778）に千手観音像を刻んだ「佛子（師）　夷村板井甚蔵國芳」（翌安永８年の如来像の仏師と同一人物か）は、現香々地町夷地区を本拠とした石工集団板井一派の頭梁で、法橋位を有し、木造仏をも得意とした。

（講堂）

⑧ 薬師如来坐像　檜材寄木造

⑨ 伝聖観音菩薩立像　檜材寄木造

岩屋にさし懸けられた講堂の奥壁に安置され、いずれも等身大以上の大きさがある。『太宰管内志』に「講堂あり南向入三間平四間の堂なり。本尊は観世音、薬師仏、傍仏は日光月光十二神将なり」とあるうちの観音像と薬師像にあたると考えられる。

以上の現天念寺所在の仏像のほか、長岩屋伝来の仏像として、昭和 30 年代に県外に流出し先年里帰りがかなった阿弥陀如来像がある。

⑩ 阿弥陀如来立像　榧材一木造、像高 198.0

後頭部と背中から内刳りを施すこの像は、穏やかな目鼻立ちや肉薄の側面観に平安後期和様彫刻の特徴が見られるが、大きめの螺髪と大腿部のＹ字状の衣文などは古式であり、11 世紀から 12 世紀にかけての頃の造立を思わせる。この仏像については、天念寺付属の行場の一つ小両子岩屋に所在したと伝え（『太宰管内志』にも『旧記』として記される）るが、六郷山長岩屋に関わる最古の遺物である。

『六郷山年代記』（長安寺文書）によれば、永久元年（1113）に天台無動寺の末寺となり、保安元年（1120）には六郷山領が延暦寺に寄進されるなど、12 世紀以後の六郷山は比叡山と強く結びつくことによって、天台系の山岳寺院として急速に組織化を遂げたものと考えられる。これにやや先行して造立された本像は、明瞭に天台宗を標榜する以前の過渡期の六郷山における阿弥陀如来信仰を反映したものと言えよう。

阿弥陀如来立像（旧天念寺）

（２）弥勒寺　西国東郡真玉町下城前

現在無住の小堂となっている唐渓山弥勒寺は、中世の古記録類には一切登場せず、その寺歴は不明な点が多い。六郷山中山本寺の一つである近隣の応暦寺（大岩屋）の元禄 14 年（1701）奥書の『應暦寺明細書控』によれば、弥勒寺は応暦寺の末寺で、かつては末坊として谷之坊・庵実坊・上之坊・慈蓮坊・下之坊の５坊をかかえていたことが知られる。ただし、安永５年（1776）の『六郷山寺院名簿』（『太宰管内志』所収）には「応暦寺末無住」とあり、少なくとも 18 世紀後半頃には既に現在の状況に近い無住の寺院になっていたと考えられる。

弥勒寺の仏像としては、次の３件４躯が伝えられる。

① 弥勒菩薩坐像　檜材寄木造、像高 113.0

② 不動明王・毘沙門天立像　檜材寄木造、像高 101.2、104.2

③ 観音菩薩立像　樟材一木造、像高 81.3

いずれも江戸時代の造立。このうち本尊の弥勒菩薩像の坐高で 113㎝は、小堂の本尊としては異例の大きさであり、かつてはかなりの規模の堂舎が所在したのであろう。作風的には、都ぶりが顕著で一見鎌倉仏を思わせる写実性を示すが、表情や衣文など細部の硬い彫り口や木取りの厚い内刳りなど、技巧的には江戸前期の京仏師の作例とみなされる。本尊弥勒像の脇侍としてその左右に安置される不動明王と毘沙門天像は、明らかに本尊とは作ぶりが異なり、おそらく本尊造立後ほどなくして付け加えられたものであろう。観音像については江戸後期の在地の作。

弥勒寺の本寺である応暦寺は、上記『明細控』や『太宰管内志』の記すところでは、一時廃絶していたのを、両子寺を再興し近世六郷山中興の祖となった順慶法印の弟子僧澄慶が、元禄 8 年（1695）

に中興したという。現在応暦寺に安置される本尊千手観音像ほかの主要諸仏はこの中興時に造立されたものである。その都ぶりの作風など、これら諸仏と類似した点の多い弥勒寺本尊弥勒菩薩像は、応暦寺中興に併せて行われたであろう末寺弥勒寺の整備事業の一環として、元禄８年からほどなくして造立されたものと考えられる。

弥勒菩薩坐像（弥勒寺）

（３）毘沙門多宝院　西国東郡真玉町大字有寺（うてら）

『太宰管内志』所収の「六郷二十八山本寺目録」に中山分末寺として登場する「毘沙門多宝院」については、六郷山寺院に関する基本史料である安貞２年(1228)の『諸勤行目録』および建武４年（1337）の『本中末寺次第并四至等注文案』のいずれにも記されず、その存在すら不明瞭である。ただ、嘉元２年（1304）の「六郷屋山例講谷役配分注文」（『太宰管内志』所収・長安寺文書）に、いずれも末山寺院である「大嶽山」「見知」「小城山」とともに月役が配分されている寺院に「毘沙門払」があるほか、年代は下るが、室町時代の成立とされる『六郷山定額院主目録』（『太宰管内志』所収）に「大岩屋山院主金剛院ノ徒廿五ヶ所、寺に有多宝院」とあるのが注目される。また、安永５年（1776）の『六郷山寺院名簿』（両子寺文書）にも「應暦寺末寺多寶院在有寺村」とある。

以上の諸記録から判断される中山末寺毘沙門多宝院は、末山寺院と考えられる「毘沙門払」とは別の寺院であり、中山本寺である大岩屋山、すなわち応暦寺の末寺の一つで、有寺村（うてらむら）に所在した多宝院の可能性が高いといえよう。この「多宝院」については、現在も西国東郡真玉町大字に同名の小堂があり、本尊に毘沙門天を安置し、ほかにも数躯の仏像が所在する。

① 毘沙門天立像　檜材寄木造、像高 68.5
② 毘沙門天立像　檜材一木造、像高 37.5
③ 不動明王立像　檜材一木造、像高 53.0
④ 観音菩薩立像　檜材寄木造、像高 43.2
⑤ 地蔵菩薩立像　檜材寄木造、像高 36.0

毘沙門天立像（多宝院）

本尊の毘沙門天立像は、玉眼の彩色像であるが、その作ぶりには癖があり、江戸中期以降の造立と見られる。もう１躯の毘沙門天と不動明王像は、一木造の技法からも稚拙な作ぶりからも江戸期の在地の作を思わせる。残りの観音像と地蔵像は、いずれも玉眼の漆箔像で、その形式的ではあるが洗練された作域は江戸中～後期頃の中央の作になるものであろう。ちなみに、地蔵像を安置する厨子に墨書銘があり、次のように読める。

〈地蔵厨子墨書銘〉

寛保三年癸亥天四月二十日　新莊沙門示現因之

一同閏四月三日古佛奉封

住持沙門太元拝閉

これにより、多宝院は少なくとも寛保３年（1743）までは有住の寺院であったことが知られる。室町時代の成立とされる『定額院主目録』に記される多宝院ではあるが、安置の仏像や境内の石造物に見るかぎり、中世まで遡る要素は何もなく、江戸中～後期に寺勢のピークがあったようである。毘沙門天を本尊とすること、「毘沙門多宝院」と呼称されることなどから、応暦寺の北方にあってその領域を守護する役割を持った寺院であったとも考えられる。

（４）平等寺　東国東郡国見町大字野田

国見町大字野田の新涯地区、伊美川右岸の丘陵の山裾に平等寺はある。現在無住で、境内に小堂を遺すのみであるが、史料の上では建武４年（1337）の注文に中山本寺千燈寺の末寺として記されるのが初見である。その後は、室町時代とされる『定額院主目録』にやはり千燈寺末寺として「伊美ノ平等寺」とあるほか、安永５年（1776）の『寺院名簿』にも「千燈寺末無住」とある。

記録の上では南北朝初期に初登場する平等寺であるが、現小堂にはそれをはるかに遡る平安仏数躯が遺存する。

①釈迦如来坐像　榧材一木造、像高 82.5

②文殊・普賢菩薩坐像　榧材一木造、像高 67.5、56.0

③二天王立像　榧材一木造

いずれも両膝や腕を除いて内刳りのない一木彫成像。このうち釈迦、文殊・普賢の釈迦三尊は、中尊の高めの肉髻、厚い膝、左腋の衲衣の折り返しなどに平安前期風の古様が見られ、簡潔な彫り口の両脇侍（本体は近年盗難のため所在不明）ともども平安中～後期頃の造立を思わせる。三尊のうち文殊像の台座に江戸後期、享和元年（1802）の修理銘があり、これらが康平七年（1064）に造立されたことを伝えている。作ぶりとの間に年代的矛盾はなく、何らかの記録（台座・光背などの

釈迦三尊像（平等寺）

旧材に銘があったか)にもとづいたものと考えられる。残りの二天王像については、体勢や彫り口にぎこちなさが目立ち、三尊からは遅れた１２世紀後半の作と見られる。

仏像の年代から、少なくとも１１世紀後半には存在したと考えられる平等寺が、建武４年（1337）の注文以前の記録、特に同注文と並んで六郷山に関わる基本史料である安貞２年（1228）の目録に登場しないのは疑問である。この点については、平等寺以外にも建武の注文に記載される寺院のうち、例えば平安末期に宇佐大宮司の祈願寺として建立された「蕗寺」（富貴寺）が、建武の注文に初めて登場し、それも本山本寺の高山寺の末寺に組み込まれているように、本来は六郷山とは関わりなく建立した寺院が、寺勢の衰えとともに六郷山寺院として編入された結果とも考えられよう。

釈迦如来坐像（釈迦三尊のうち）

平等寺のある国見町野田の一帯は、宇佐宮弥勒寺領伊美荘の故地であり、あるいは同寺は同荘園の開発支配に関わる寺院であった可能性もある。その創建は、仏像の修理銘にいう康平７年（1064）頃が下限であり、六郷山への編入は『六郷山諸勤行目録』の安貞２年（1228）から建武の注文が作成された建武４年（1337）の間であったと考えられる。

（５）虚空蔵寺　東国東郡大字下成仏

『六郷二十八山本寺目録』に末山分末寺として記載される「虚空蔵寺」は、建武４年の注文にも末山末寺の一つとして「虚空蔵寺　成仏寺ノ末寺也」とあるものに該当する可能性が高い。ただ、安貞２年の目録に中山分の一ヶ寺として「虚空蔵石屋、本尊如名、修正月会正月十三日、虚空蔵講毎月十三日勤之」と記される「虚空蔵石屋」は、その記載の順序（長岩屋・龍門岩屋の次、黒土岩屋の前に記される）からして、現在も長岩屋の谷筋とは屋山を鋏んだ加礼川の谷筋の最奥部に所在する同名の岩屋のことと考えられる。成仏寺の末寺としての虚空蔵寺は、現在の成仏寺から２kmほど田深川に沿って下った対岸の山中にあり、安永５年（1776）の『六郷山寺院名簿』には、成仏寺下の「虚空蔵堂」として記されている。

虚空蔵寺跡の現地は谷筋に沿った丘陵の斜面に位置し、建物跡と見られる数段の平地があり、その最上部に奥の院と見られる岩屋がある。その岩屋には、現在立像・坐像あわせて７躯（ほかに残欠６点）のいわゆる焼仏が所在する。また、このほかにも虚空蔵寺関係の仏像としては、県道成仏―赤根線から同寺跡に至る山道の入口にある禅林寺境内観音堂に、同寺の廃寺化にともなって移されたと伝える菩薩像２躯がある。

① 仏像残欠（焼仏）　いずれも榧材一木造

　　如来立像（２）　現高 132.0、128.0

如来坐像　　現高 77.5

菩薩立像（4）　現高 101.5、88.0、92.5、66.0

② 虚空蔵菩薩坐像　檜材寄木造、像高 52.5

③ 千手観音立像　榧材一木造、像高 109.5

焼仏はいずれも損傷痛ましいが、すべて内刳りのない一木造で、僅かに残った衣文の痕跡や肉取りの隆起などから、平安後期、11・12 世紀頃の造立になることは確かである。如来３躯、菩薩４躯の尊像の組み合わせ、および法量から判断して、少なくとも如来を中尊に両脇侍菩薩からなる三尊像が２組と如来のみの計３件の本尊構成が可能である。つまり、平安後期の段階でこれらを本尊として安置する堂舎が最低３棟存在したということである。

次に禅林寺観音堂に安置される２躯の虚空蔵寺旧仏のうち、虚空蔵菩薩坐像は目に玉眼を嵌入した都ぶりの仏像で、その一種癖のある表情、誇張された衣文、特徴的な服制は、これが江戸前期頃に流行した黄檗系の仏像の形式に則っていることは明らかである。本像が虚空蔵寺の旧仏（その尊名からは本尊にあたるか）とすれば、同寺は一時的に黄檗宗の時期があったのかも知れない。一方の千手観音立像については、脇手の多くを欠失し、上半身から頭部にかけて後世の補修が著しいが、両肩に懸かる髪筋や分厚い下半身を蔽う衣摺の鋭い彫り口、あるいは下半身に重心を置くプロポーション、腹部を突き出した側面観など、平安前期の檀像に通ずる古様を示す。裳折返しの形式化した衣文や総体に飜波くずれが見られる点など、年代の下降する要素もあり、平安前期から藤原期へ移行する 10 世紀末から 11 世紀にかけての像立と見なされる。

いずれにせよ、岩屋に安置の焼仏を含めて多くの平安仏を擁した虚空蔵寺が平安時代まで遡る寺院であることは確実である。建武４年（1337）の注文に初めて登場する（前述のように安貞２年の目録に記される「虚空蔵岩屋」とは別寺院である）虚空蔵寺は、これもまた本来は六郷山とは関わりなく存在した寺院であったのだろうか。

虚空蔵菩薩坐像（禅林寺観音堂）

千手観音立像（禅林寺観音堂）

以上、本年度調査を行った７ヶ寺のうち、遺構の確認される天念寺・弥勒寺・毘沙門多宝院・平等寺・虚空蔵寺の５ヶ寺について、そこに安置される仏像の遺存状況を通して、各寺院の推移を概観した。それによれば、現在の観点から同じ六郷山寺院として総括される各寺院も、平安時代に山岳寺院として徐々に整備され、組織化されてきた本来の六郷山寺院（天念寺）と、もとは六郷山とは関わりなく、たとえば国東半島に展開した荘園の支配に関わって成立した寺院（平等寺、あるいは虚空蔵寺も）が、後に何らかの理由で六郷山に組み込まれた場合、さらには同じ六郷山寺院ではあっても、主要寺院の末寺としてその成立が中・近世に降るもの（弥勒寺・毘沙門多宝院）など、いくつかの類型を想定することが必要と思われる。いずれにせよ寺院遺跡の調査においては、考古学的手法を基盤に据えながらも、文献史料や石造物、さらにはこうした仏像の調査がある程度有効な手段となり得ることは言うまでもない。

（渡辺文雄）

大分県立歴史博物館報告書第３集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅷ

平成 12 年 3 月 31 日

発　行　大分県立歴史博物館
〒872-0101　大分県宇佐市大字高森字京塚
印　刷　明治印刷株式会社
宇佐市大字長洲 607